

14.4

1067

昭和十五年東京市人口動態速報

一、人口の移出入概況

二、本邦六大都市國勢調査人口

東京市役所

176



\* 0033214000 \*

0033214-000

14.4-1067

東京市人口動態速報

東京市総務局統計課・編

東京市総務局統計課

昭和15年

昭和16

AFD



例言

一、本書は東京市人口動態調査規程（改正昭和十年十二月市訓令甲第百二十一號）に依り、各區長の作成報告せる人口動態調査個票に基いて、之を集計製表したものであつて、昭和十五年本市に於ける現住人の婚姻、離婚、出生、死産、死亡に關する概要である。

統計表の編製方法は左記の通りである。

婚姻及離婚は婚家の所在地に依り、出生は母の住所に依り、死産は産婦の住所に依り、死亡は死亡者の住所に依り、地域の區分を行つた。但し住所不明なる死亡者は死亡の場所に依り、産婦の住所不明なる死産は發見の場所に依る。

十一、届出の關係上、昭和十五年の事實であつても同年中に届出のないものが多少あるが、本編に於ては便宜上、本年十二月末日迄に届出ありたる届出遅れの分を追加輯録した。尙昭和十五年の人口動態に關する全面的な詳細なる調査の結果は年を越へて刊行する第三十八回東京市統計年表人口統計編に就いて觀察利用せられん事を望む。

一、本編附録に去る四月十八日付官報を以て告示發表された昭和十五年國勢調査人口確定數中本邦六大都市に關するもの並に同年本市に於ける人口の移出入概況を追加輯録した。尙人口の移出入に關する統計は東京市統計報告例（改正昭和十二年一月市訓令甲第百九號）の規程に依り、各區長よりの寄留に依る人口異動報告に基き集計せるものである。

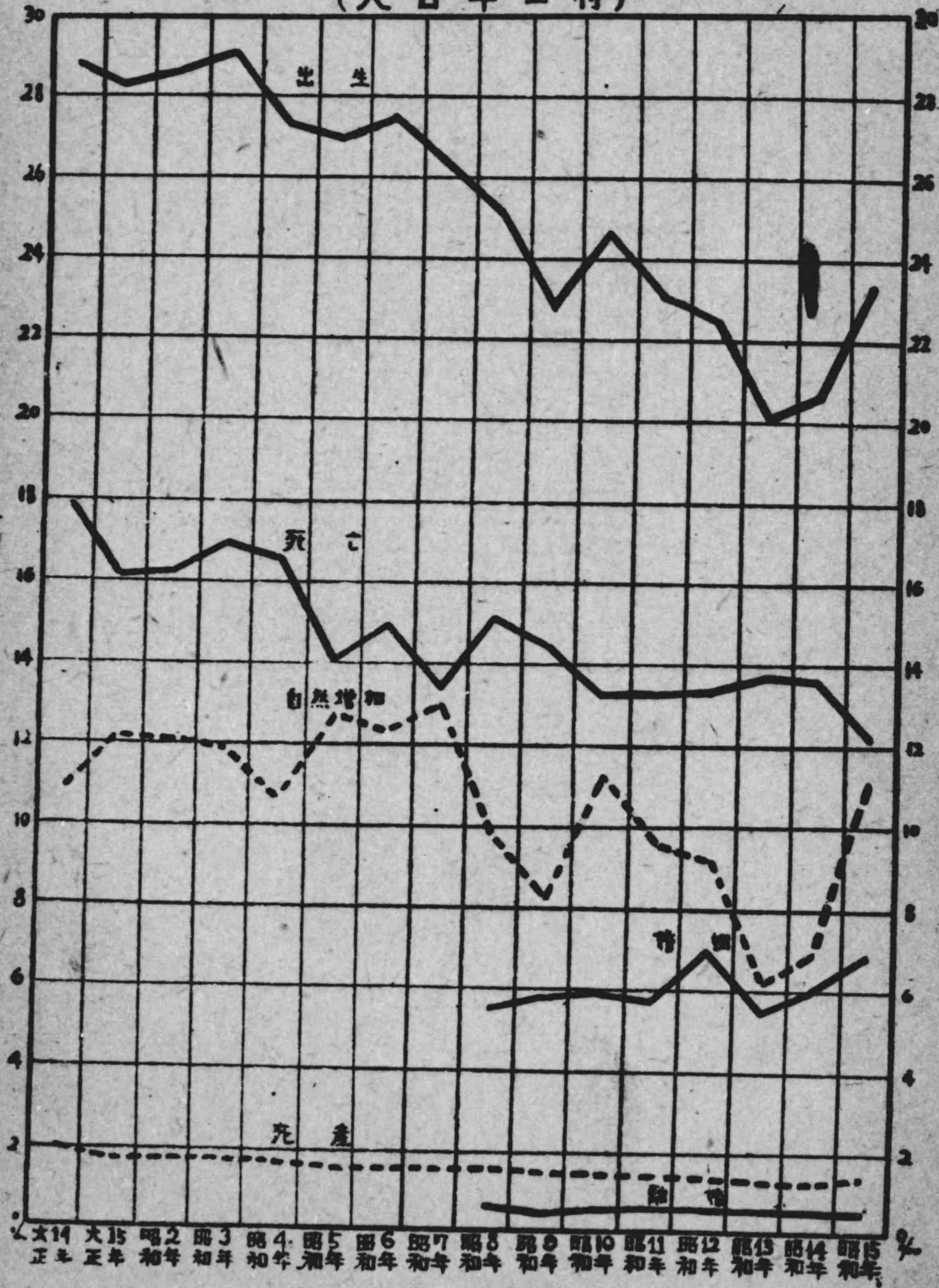
(イ) 移入人口は住所寄留にして(一)入寄留者(二)出寄留者の復歸を内容とし

(ロ) 移出人口は住所寄留にして(一)出寄留者(二)入寄留者の退去(三)職權に依る寄留抹消を内容とする。





婚姻離婚出生死亡死産及人口自然増加率(累年)  
(人口千=付)



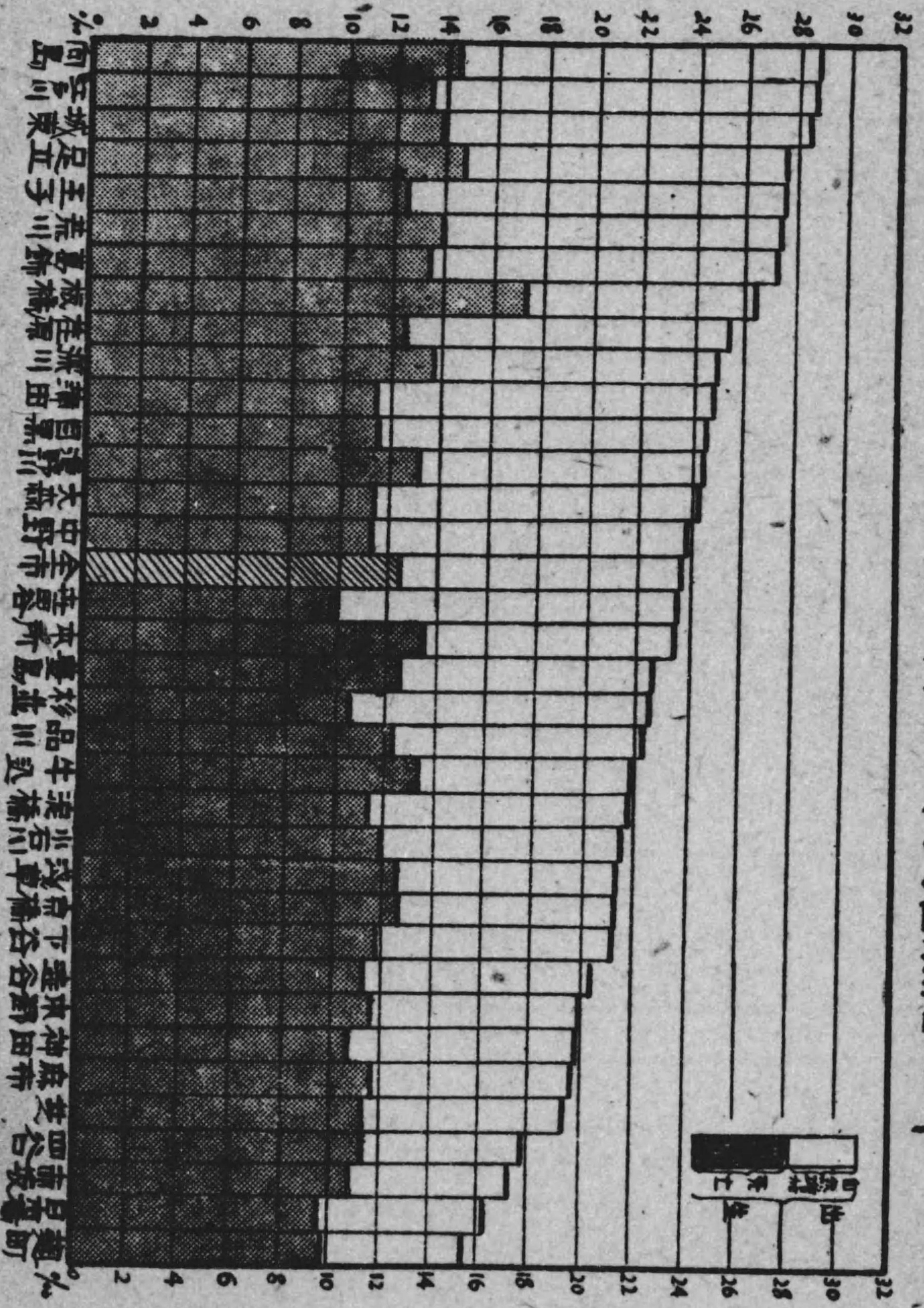
一、既住に於ける計数は昭和七年十月一日市域擴張當時の大東京の地域に基き組替編成したるものであつて、既刊「東京市統計年表」所載の資料に依り編整した。尙比例算出に用ひたる人口は國勢調査の施行せられたる年以外は總て推計人口である。

昭和十六年八月一日

東京市總務局統計課



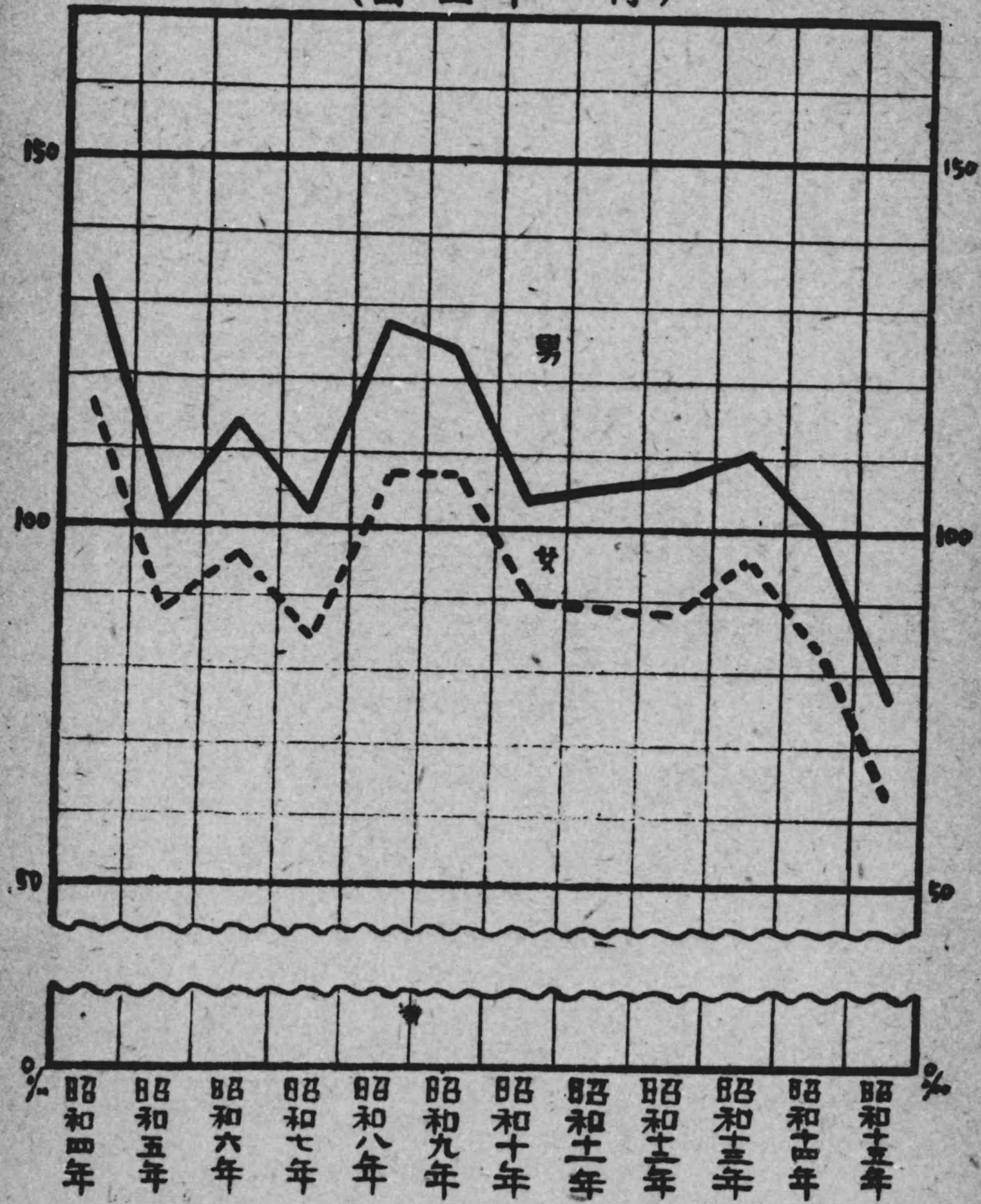
# 昭和十五年 區別 出生率死亡率及自然增加率





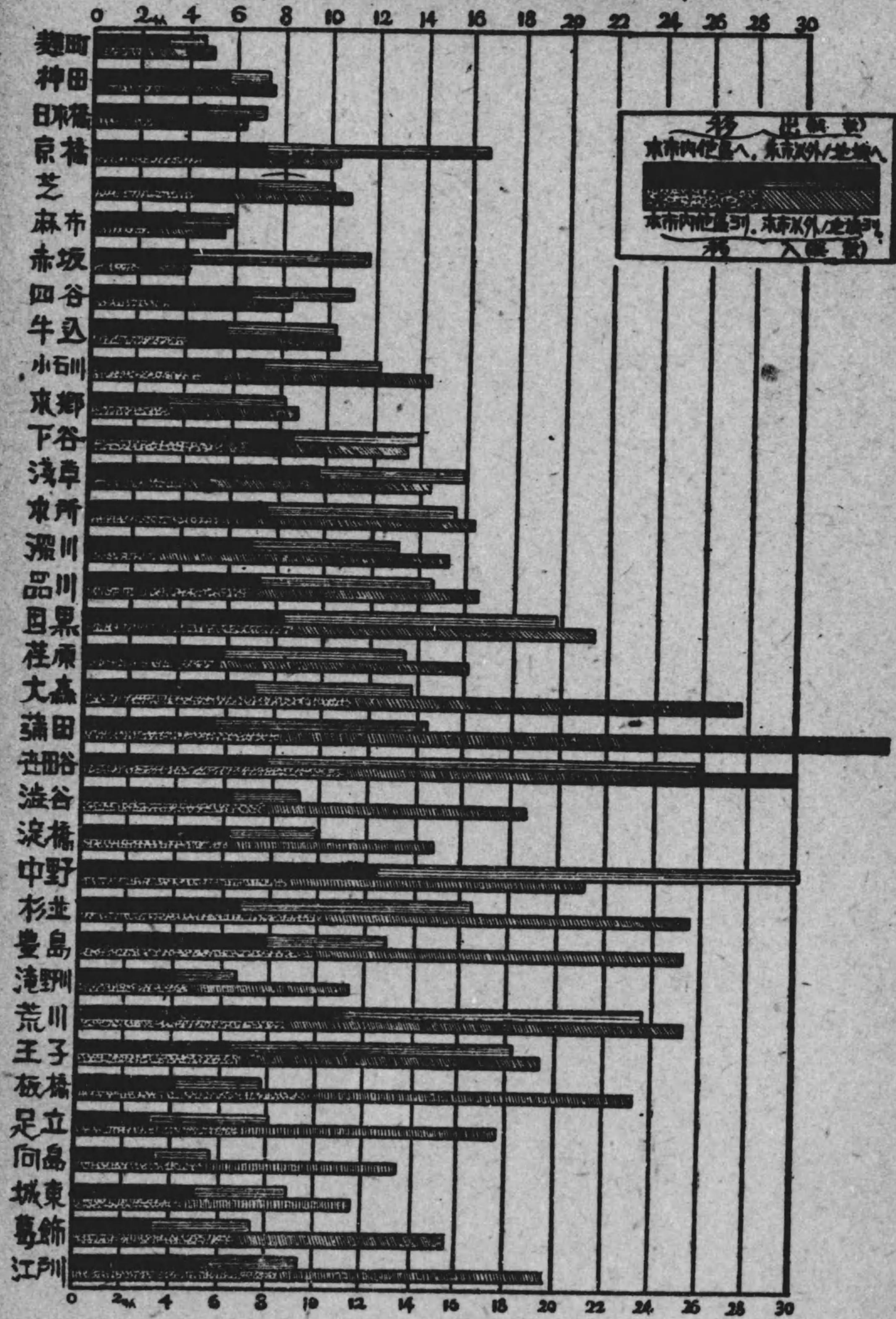
# 乳兒死亡率(累年)

(出生千=付)





# 昭和十五年移出人口







14.4  
1067

# 昭和十五年東京市人口動態速報

## 目次

### 例言

### 統計圖

#### 第一章 婚姻

一、婚姻件数及婚姻率……………一

(イ)婚姻件数 (ロ)區別婚姻率……………一

二、婚姻の月別……………三

三、婚姻の種類……………三

#### 第二章 離婚

一、離婚件数及離婚率……………四

(イ)離婚件数 (ロ)區別離婚率……………四

二、離婚の月別……………六

三、離婚の種類……………六

#### 第三章 出生

一、出生数及出生率……………七

(イ)出生数 (ロ)區別出生率……………七

二、出生の月別……………九

三、出生児の體性……………九

四、出生児の身分……………一〇

(イ)出生児の身分 (ロ)身分別出生児の體性……………一〇

(ハ)區別私生児……………一〇

#### 第四章 死産

一、死産数及死産率……………一三

(イ)死産数 (ロ)區別死産率……………一三

二、死産の月別……………一四

三、死産児の體性……………一五

四、死産児の身分……………一六

(イ)死産児の身分 (ロ)身分別死産児の體性……………一六

(ハ)區別私生死産児……………一六

#### 第五章 出産

一、出産数及出産率……………一八

(イ)出産数 (ロ)區別出産率……………一八



(イ) 出産数 (ロ) 區別出産率  
 二、複産.....三  
 (イ) 複産件数 (ロ) 産兒の體性別複産  
 三、複産兒数.....三  
 (イ) 複産兒の出生及死産  
 (ロ) 身分及出生死産別複産兒数  
 第六章 死 亡.....三  
 一、死亡数及死亡率.....三  
 (イ) 死亡数 (ロ) 區別死亡率  
 二、死亡の月別.....三  
 三、死亡者の體性.....三  
 四、死亡者の配偶關係.....三  
 五、乳兒死亡.....三  
 (イ) 乳兒死亡数 (ロ) 區別乳兒死亡率  
 (ハ) 乳兒死亡の月別 (ニ) 乳兒死亡の體性  
 第七章 人口の自然増加.....三  
 一、人口の自然増加.....三  
 (イ) 人口の自然増加数 (ロ) 區別自然増加率  
 (ハ) 自然増加の月別  
 二、男女人口の自然増加.....三

二  
 一、人口の移出入概況.....三  
 一、移入人口.....三  
 (イ) 移入人口及其の前住地 (ロ) 移入人口の男女割合  
 (ハ) 區別移入人口  
 二、移出入口.....三  
 (イ) 移出入口及其の轉住地  
 (ロ) 移出入口の男女割合 (ハ) 區別移出入口  
 三、移入又は移出超過.....三  
 (イ) 移入超過人口及其の前住地 (ロ) 移入超過人口の男女割合 (ハ) 區別移入又は移出超過人口  
 二、昭和十五年本邦六大都市國勢調査人口.....三

附 録

第一章 婚 姻

一、婚姻件数及婚姻率

(イ) 婚姻件数

昭和十五年本市に於ける婚姻件数は五三、九五一件、即ち一日平均一四七件であつて前年(四五、五〇二件)に較べると八、四四九件の激増である。  
 然るに市外(六、六八五件)を除いた件数(註)は四七、二六六件で、婚姻率(人口千に對する婚姻件数の割合)は六、九七に該る。  
 之を前年と比較すると件数に於て七、七二八件、割合に於て〇、九六の増加を示してゐる。

市外を除いた婚姻件数を昭和八年以降に就いて見ると昭和八年には二萬臺であつたが九年より十一年迄は三萬臺となり更に十二年には日支事變勃發の爲後半期より届出の激増を見、その數四萬を超え例年に見ざる多數を示すに至つた。

然るに十三、十四年再び三萬臺に逆轉したが當年に至

り十二年の四萬二千餘をも突破し前年にない激増を見るに至つた。

次に婚姻率を見ると昭和八年以降五・〇〇%乃至七・〇〇%の間に在り當年は前年に見ざる高率を示してゐる。

(註)婚姻件数は婚姻直前夫妻共本市内に在りたるもの及夫妻の孰れか一方が本市内に在りたるものは各一件として計上される。

從つて婚家の所在地別に編整する場合に於ては市外として表示されるものあり。(離婚も之に準ず)

年 次	婚姻件数	人 口	人口千に付
昭和八年	二九、二六三	五、四九五、四六〇	五・四七
昭和九年	三三、〇六五	五、六八二、五七〇	五・八二
昭和十年	三四、八六六	五、八七五、六六七	五・九三
昭和十一年	三四、二六四	六、〇八五、八〇〇	五・六五
昭和十二年	四三、六六七	六、二七四、〇〇〇	六・八五
昭和十三年	三四、八九四	六、四七五、六〇〇	五・四〇
昭和十四年	三九、五五八	六、五八一、〇〇〇	六・〇二
昭和十五年	四七、三六六	六、七六八、八〇四	六・九七

(ロ) 區別婚姻率  
 婚姻率を區別に見ると蒲田の八・二四%が最も高く日



本橋、牛込（各八・〇〇%以上）浅草、荒川、神田、瀧野川、向島、下谷、四谷（各七・六〇%以上）之に亞ぎ最も低いのは麴町の五・一四%であつて目黒、赤坂（各五・七〇%以上）等順次相亞ぐ。

之を前年に較べると新市部で蒲田、板橋の二區は減少し兩餘の三十三區は何れも増加し、就中舊市部で日本橋、下谷、神田、麻布の四區、新市部で城東、品川、杉並、荒川、瀧野川の五區に於て著し。

區名	婚姻件數		人口千に付婚姻	
	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
總數	五、〇三三	五、〇三一	六・〇	六・七
全市	三、〇六八	三、〇三一	三・五	三・〇
神田	三、七六	三、七〇	三・九	三・八
日本橋	五、六	五、六	八・〇	八・〇
芝	一、二二	一、二二	五・五	六・三

區名	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
瀧野川	八三〇	一、〇一九	六・六	七・八
豊島	一、五八四	一、九七五	五・四	六・三
杉並	一、三三〇	一、六三三	五・三	六・六
中野	一、三〇〇	一、三六一	五・七	六・五
淀橋	一、二二	一、二五	六・一	六・六
世田谷	一、五七	一、七二	六・七	六・七
蒲田	一、六〇	一、六九	五・一	六・〇
大森	一、二二	一、二二	六・七	六・七
荏原	一、一五	一、二七	五・八	六・七
目黒	一、〇一一	一、一五一	五・四	五・九
品川	一、三六	一、三〇	五・六	七・〇
新市部	一、八八〇	二、一三	六・三	六・八
深川	一、三六〇	一、五二	五・六	六・七
本所	一、五五	一、七七	五・〇	六・五
浅草	一、九四九	二、一〇	六・五	七・九
下谷	一、二一九	一、四四	五・五	七・六
本郷	九三	一、〇三	六・四	六・九
小石川	九三	一、〇三	六・四	七・三
牛込	八九	一、〇二	六・八	八・〇
四谷	五〇九	五八一	六・六	七・六
赤坂	三九	三九	四・九	五・八
麻布	四七	六二	四・九	五・八

區名	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
荒川	三、〇〇〇	三、七五九	六・六	七・八
王子	一、三三	一、四七	五・九	六・九
板橋	一、二六〇	一、六二九	七・五	六・九
足立	一、五八五	一、五八五	六・六	六・七
向島	一、二二	一、五七九	六・七	七・五
城東	一、〇八	一、一〇	五・三	六・七
葛飾	八三	一、〇	六・五	七・三
江戸川	一、〇〇	一、一七	六・五	六・六
市外	五、九	六、六	六・六	六・六

婚姻の届出を月別に見ると最も多いのは五月であつて十二月、四月、三月、二月之に亞ぎ一年一日平均を千とする各月の指數は何れも千以上を示し、之に反し最も少いのは一月であつて七月、八月、九月、十月、十一月順次相亞ぎ、各月の指數は何れも千に満たない。即ち概して春及秋から冬にかけて婚姻の届出は多く夏に於て少い。

この逐月移行は多少起伏に相違があるが大體毎年同様である。

婚姻の月別

婚姻の種類を普通婚姻、入夫婚姻、婿養子婚姻に分けて見ると其の殆んど全部が普通婚姻であつて五〇、七四一件を計へ（總數の九四・〇%）婿養子婚姻は一、九一六件（三・六%）入夫婚姻は一、二九四件（二・四%）に過ぎ

三、婚姻の種類

月次	婚姻件數		一年一日平均婚姻を千とする各月の指數	
	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
一月	三、七三	三、七三	〇・七	〇・七
二月	三、六五〇	三、六五〇	一、〇六	一、〇八
三月	四、〇五	四、〇五	一、〇八	一、一〇
四月	四、六八	四、六八	一、一三	一、一三
五月	五、五	五、一〇	一、四七	一、三三
六月	四、一六	四、一六	一、一三	一、一〇
七月	三、七五九	三、七五九	〇・九	〇・八
八月	三、六六〇	三、六六〇	〇・九	〇・八
九月	三、七五	三、七五	〇・九	〇・八
十月	三、八三四	三、八三四	〇・九	〇・八
十一月	四、四六	四、四六	一、〇三	一、〇三
十二月	四、四六	四、四六	一、〇三	一、〇三



なす。

之を前年に較べると普通婚姻は同率を示し入夫婚姻は微減、婿養子婚姻は微増を見るに至つた。

婚姻の種類

種別	婚姻件数		總數百中	
	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
總數	2,503	2,511	100.0	100.0
普通婚姻	2,371	2,371	94.7	94.0
入夫婚姻	1,126	1,294	44.6	51.5
婿養子婚姻	1,105	1,116	43.5	44.5

第二章 離婚

一、離婚件数及離婚率

(イ)離婚件数

昭和十五年本市に於ける離婚件数は三、六〇八件(一日平均一〇件)であつて前年(三、六三〇件)に較べると二二件の減少である。

然るに市外(三九四件)を除いた件数(註)は三、二二四件であつて離婚率(人口千に對する離婚件数の割合)

昭和十三年	2,971	6,577	0.45	8.51
昭和十四年	3,155	6,511	0.48	7.95
昭和十五年	3,322	6,781	0.49	6.80

(ロ)區別離婚率

特殊離婚率を區別に見ると牛込の八・三六%が最も高く日本橋、浅草、四谷、小石川(各七・八〇%以上)之に亞ぎ、最も低いのは麴町の四・六五%であつて目黒、麻布、神田、瀧野川(各五・五〇%以下)相亞いで低い。

之を前年に較べると舊市部で日本橋、四谷、牛込の三区、新市部で豊島、王子、澁谷、世田谷の四區は増加し、兩餘の二十八區は何れも減少し、就中、麴町、目黒、神田、麻布、向島、瀧野川の六區に於て著しい。

區名	離婚件数		人口千に付		婚姻百に付	
	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
總數	2,503	2,511	0.45	0.49	7.95	6.80
舊市部	1,105	1,116	0.43	0.44	44.5	44.5
新市部	1,398	1,395	0.52	0.55	35.0	24.0

は〇・四七に該る。

之を前年に較べると件数に於て六九件の増加を見たるも割合に於ては、却つて〇・〇一の減少を見るに至つた。

尙特殊離婚率(婚姻百に對する離婚件数の割合)は六・八〇であつて前年に較べて一・二五の低率を示してゐる。

市外を除いた離婚件数を昭和八年以降に見ると昭和八年には三千臺、九年には二千臺と逐年三千臺乃至二千臺を交互に繰返して來たが、十四年並に當年は共に三千臺を示してゐる。尙特殊離婚率に就いてこれを見るに八年の一〇・三六%を除いては毎年八・〇〇%臺を中心に前後して來たが當年に至り七・〇〇%臺を割り前年に見ざる低率を示すに至つた。

離婚、婚累年

年次	離婚件数	人口千に付	婚姻百に付	
昭和八年	3,035	5,495	0.55	10.56
昭和九年	2,329	5,623	0.41	7.84
昭和十年	3,121	5,875	0.53	9.07
昭和十一年	2,955	6,085	0.49	8.71
昭和十二年	3,166	6,274	0.50	7.77

區名	昭和十四年	昭和十五年	人口千に付	婚姻百に付
神田	75	55	0.52	8.88
日本橋	42	67	0.55	7.09
芝	70	66	0.44	7.80
京橋	70	66	0.44	7.80
赤坂	87	91	0.48	7.82
麻布	55	55	0.40	8.01
四谷	33	35	0.45	8.33
牛込	77	87	0.60	7.27
小石川	77	76	0.55	7.95
本郷	69	60	0.44	7.41
下谷	63	63	0.44	7.33
浅草	62	62	0.44	7.33
本所	62	62	0.44	7.33
深川	62	62	0.44	7.33
新市部	1,212	1,212	0.47	7.33
品川	23	23	0.16	7.33
目黒	89	62	0.44	8.85
荏原	81	82	0.44	8.85
大森	26	25	0.18	7.01
蒲田	17	23	0.15	6.33
世田谷	8	10	0.07	6.33
澁谷	22	27	0.17	6.33
澁谷橋	15	15	0.11	6.33



市外	江川	葛飾	城東	向島	尼立	板橋	王子	荒川	瀧野川	豊島	杉並	中野
八	六	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
八	六	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
八	六	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
八	六	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
八	六	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
八	六	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
八	六	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
八	六	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
八	六	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
八	六	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇

### 二、離婚の月別

離婚の届出を月別に見ると五月が最も多く十二月、十一月、二月、三月、八月、九月、六月等順次相次ぐ。起伏に多少の相違はあるが大體一月から七月にかけて逐月漸減し七月を境とし翌八月より逐月漸増して十二月に至る。

之を前年に較べると多少の高低はあるが大體同様の態

月次	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
一月	三、五〇	三、五八	一、〇〇	一、〇〇
二月	三、三三	三、二二	一、〇三	一、〇七
三月	三、一八	三、三九	一、〇九	一、〇七
四月	三、三三	三、九〇	一、二〇	一、二〇
五月	三、七〇	三、八二	一、三三	一、三〇
六月	三、五〇	三、九〇	一、二六	一、二七
七月	三、二四	三、三三	一、一六	一、一七
八月	三、〇〇	三、三六	一、〇八	一、〇七
九月	二、九〇	三、七一	一、〇七	一、〇六
十月	三、三三	三、〇五	一、〇三	一、〇九
十一月	三、三六	三、三三	一、〇六	一、二六
十二月	三、〇〇	三、五三	一、〇七	一、二二

### 三、離婚の種類

離婚の種類を「妻が夫の家を去る離婚」「夫が妻の家を去る離婚」「双方婚家に留まる離婚」に分けて見ると、妻

が夫の家を去る離婚が大部分であつて三、二九七件を計へ(總数の九一・四%) 夫が妻の家を去る離婚は二七八件(七・七%) 双方婚家に留まる離婚は三三三件(〇・九%)に過ぎない。

之を前年に較べると妻が夫の家を去る離婚は(一・七%)増加を示したるも、夫が妻の家を去る離婚(一・〇%) 双方婚家に留まる離婚(〇・七%) は共に減少した。

種類	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
妻が夫の家を去る離婚	三、二九七	三、二九七	八、九七	九、一四
夫が妻の家を去る離婚	三、二五	三、二六	八、七	七、七
双方婚家に留まる離婚	三、三七	三、三	一、六	〇、九
總数	三、六〇	三、六八	一、〇〇	一、〇〇

### 第三章 出生

#### 一、出生数及出生率

(イ)出生数

昭和十五年本市に於ける出生は一五九、六六九であつて、一日平均四三六となり、出生率(人口千に對する出生の割合)は二三・五五に該る。

之を前年に較べると出生数に於て二三、七〇九、割合に於て二・八九の増加である。

出生数を最近十年間に就いて見るに昭和六年より八年迄は十三萬臺であつたが、九年には十二萬臺に下り、翌十年轉じて十四萬臺の多數を計ふるに至つた。

然るに十一年には再び十三萬臺、十二年には更に十四萬臺に恢復したが十三年には逆轉して十三萬臺を割り、十四年漸く十三萬臺に昇り更に當年に至り一躍十五萬に果増し近年になき激増を見るに至つた。

次に出生率から見ると昭和六年より八年迄は二六・〇%臺を上下して來たが以後十年の二四・五八%を除けば十二年迄は二二・〇%臺、十三年、十四年は二〇・〇%と漸次低下し事變下出生の減退を如實に物語つてゐるが事變當初から四年目の當年に至つて稍々上昇して二三・〇%臺に恢復した。



年次	出生数	人口	人口千に付出生
昭和六年	一五九、四九九	五、三九、八六〇	二七・三
昭和七年	一五九、九五四	五、三一四、七〇〇	二六・三
昭和八年	一三三、八三九	五、〇九五、四六〇	二五・八
昭和九年	一三五、三〇〇	五、六八二、三〇〇	二五・三
昭和十年	一四四、四四四	五、八七五、六六七	二四・六
昭和十一年	一三九、二五三	六、〇八五、八〇〇	二二・六
昭和十二年	一四一、三三四	六、二七四、〇〇〇	二二・三
昭和十三年	一三九、一四六	六、四四七、〇〇〇	二〇・〇
昭和十四年	一三五、六六〇	六、五九一、〇〇〇	二〇・六
昭和十五年	一五九、六六九	六、七七八、〇〇〇	二二・五

(ロ) 區別出生率

出生率を區別に見ると向島の二八・七三%が最も高く、江戸川、城東、足立、王子、荒川、葛飾(各二七・〇〇%以上)之に亞ぎ、最も低いのは麴町の一五・二九%であつて、日本橋、赤坂、四谷(各一八・〇〇%以下)順次相亞ぎ、概して舊市部に低く、新市部特に江東方面に高い。之を前年に較べると新市部の蒲田、板橋、葛飾の三区は減少し、爾餘の三十二區は何れも増加した。

區名	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
	出生数	出生数	人口千に付出生	人口千に付出生
全市	一、五、六〇〇	一、五、六〇〇	二〇・六	二〇・五
新市部	四、〇、二〇〇	四、〇、二〇〇	二〇・六	二〇・六
舊市部	八、二	八、九	二〇・六	二〇・六
神田	二、二〇〇	二、二〇〇	二〇・六	二〇・六
日本橋	一、五五〇	一、五五〇	二〇・六	二〇・六
京橋	二、七〇〇	二、七〇〇	二〇・六	二〇・六
芝	三、九九九	三、九九九	二〇・六	二〇・六
麻布	一、四三三	一、四三三	二〇・六	二〇・六
赤坂	八六一	八六一	二〇・六	二〇・六
四谷	一、二六〇	一、二六〇	二〇・六	二〇・六
牛込	二、五九九	二、五九九	二〇・六	二〇・六
小石川	二、七五八	二、七五八	二〇・六	二〇・六
本郷	二、四四九	二、四四九	二〇・六	二〇・六
下谷	三、三三三	三、三三三	二〇・六	二〇・六
浅草	五、一〇五	五、一〇五	二〇・六	二〇・六
本所	五、六三六	五、六三六	二〇・六	二〇・六
深川	四、八二六	四、八二六	二〇・六	二〇・六
新市部	四、七七〇	四、七七〇	二〇・六	二〇・六
品川	四、五七九	四、五七九	二〇・六	二〇・六

目録	出生数	人口	人口千に付出生
黒原	四、八八二	三、三〇七	二四・四
荏原	四、二二三	三、三〇七	二五・七
大森	五、四九五	三、三〇七	二四・〇
蒲田	五、〇五一	三、三〇七	二四・六
世田谷	五、四四四	三、三〇七	二四・六
澁谷	四、八二五	三、三〇七	二四・六
中野	三、四八〇	三、三〇七	二二・五
杉並	四、四八九	三、三〇七	二四・九
豊島	四、八三四	三、三〇七	二四・九
荒川	六、〇八六	三、三〇七	二四・九
瀧野川	二、六九〇	三、三〇七	二二・五
板橋	八、〇三三	三、三〇七	二四・三
足立	五、〇三三	三、三〇七	二四・三
向島	四、八七〇	三、三〇七	二四・三
葛飾	五、二四八	三、三〇七	二四・三
城東	四、三七〇	三、三〇七	二四・三
葛飾	三、四六二	三、三〇七	二四・三
江戸川	四、三六一	三、三〇七	二四・三

二、出生の月別

出生の届出を月別に見ると最も多いのは一月であつて十一月、二月、三月順次相亞ぎ、之に反して最も少いの

月次	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
	出生数	出生数	一年一日平均出生を千とする各月の指数	對前年増減
一	三、〇〇〇	三、二二七	一、〇〇〇	一、〇〇〇
二	三、三三三	三、三三三	一、一〇〇	一、一〇〇
三	三、三三三	三、三三三	一、一〇〇	一、一〇〇
四	三、三三三	三、三三三	一、一〇〇	一、一〇〇
五	三、三三三	三、三三三	一、一〇〇	一、一〇〇
六	三、三三三	三、三三三	一、一〇〇	一、一〇〇
七	三、三三三	三、三三三	一、一〇〇	一、一〇〇

は五月であつて七月、六月、八月、四月之に亞ぐ。即ち出生は一月より三月の年の始めに多く、四月より減少を辿りつゝ五月には最低となり、多少の起伏はあるが、六月より一轉して順調なる増加を重ねつゝ十一月に達する。然るに十二月は激減し、九月に亞ぐ少數となる。各月の出生数を前年のそれに較べると各月共増加し就中一月、三月、六月、十二月に於て著しい。



八月	九、九七	二、一九	八七	八八	一、三三
九月	二、二六	三、七三	一、〇一	九七	一、四七
十月	三、八五	二、七三	一、〇七	一、〇五	一、五九
十一月	三、九七	三、四八	一、三二	一、八八	一、五七
十二月	九、八三	二、四六	八七	九〇	二、六五

三、出生児の體性

出生児の總數一五九、六六九中男八二、一〇二、女七七、五六七であつて、男は女より四、五三五多く女百に付男の割合は一〇五・八に該る。之を昭和八年以降に就いて見ると十三年の一〇七・七を除けば大體一〇五・〇を中心として上下してゐる。

尙男女の割合を月別に見ると一月の女超過を除けば、各月共男超過にして、就中十月、十二月に於て著しい。

出生児の體性

年次及月	男	女	女百に付男
昭和八年	六、九七	六、八六	一〇七
昭和九年	六、〇三	六、二八	一〇四
昭和十年	七、四六	六、九三	一〇七
昭和十一年	七、六〇	六、六八	一〇九
昭和十二年	七、〇七	六、六六	一〇七

四、出生児の身分

(イ)出生児の身分  
出生児の身分に依つて分つと公生は一五五、一九四であつて總數の九七・二〇%を占め、私生(庶子をも含む)は僅かに四、四七五(二・八〇%)に過ぎない。之を既往に就いて見るに公生の割合逐年漸増し、私生の割合は漸

年次	公生	私生	女百に付男
昭和十三年	六、九七	六、二七	一〇七
昭和十四年	六、九七	六、八五	一〇八
昭和十五年	八、一〇	七、五七	一〇八
昭和十三年	二、一四	一、七〇	九七
昭和十四年	七、三六	六、八三	一〇七
昭和十五年	七、三六	七、三二	一〇七
昭和十三年	五、七四	五、六三	一〇三
昭和十四年	五、〇三	四、七九	一〇四
昭和十五年	五、二七	四、八九	一〇七
昭和十三年	五、三三	五、一三	一〇四
昭和十四年	五、七〇	五、四九	一〇七
昭和十五年	六、五二	六、三三	一〇七
昭和十三年	六、二七	六、五五	一〇九
昭和十四年	八、〇三	七、四七	一〇七
昭和十五年	六、八五	五、五九	一〇三

減の趨勢に在る。

身分別出生

年次	總數	公生	私生	公生私生
昭和八年	一三、八三	一三、〇六	六、七五	九七・六
昭和九年	一三、〇〇	一三、〇〇	六、〇六	九七・六
昭和十年	一四、二二	一三、一三	六、三六	九七・六
昭和十一年	一三、三三	一三、一三	六、三六	九七・六
昭和十二年	一三、三三	一三、一三	六、三六	九七・六
昭和十三年	一三、三三	一三、一三	六、三六	九七・六
昭和十四年	一三、三三	一三、一三	六、三六	九七・六
昭和十五年	一三、三三	一三、一三	六、三六	九七・六

(ロ)身分別出生児の體性

出生児の身分別に男女の割合を見ると女百に付男の公生は一〇六・〇の男超過であり、私生は九九・一の女超過を示してゐる。

之を昭和八年以降に就いて見ると十四年及當年の私生に於ける女超過を除けば、常に男超過にして、超過の程度は私生よりも公生に於て稍々大である。

身分別出生児の體性

年次	公生	私生	女百に付男
昭和八年	六、九七	六、二七	一〇七
昭和九年	六、九七	六、八五	一〇八
昭和十年	八、一〇	七、五七	一〇八
昭和十一年	二、一四	一、七〇	九七
昭和十二年	七、三六	六、八三	一〇七
昭和十三年	七、三六	七、三二	一〇七
昭和十四年	五、七四	五、六三	一〇三
昭和十五年	五、〇三	四、七九	一〇四
昭和十三年	五、二七	四、八九	一〇七
昭和十四年	五、三三	五、一三	一〇四
昭和十五年	五、七〇	五、四九	一〇七
昭和十三年	六、二七	六、五五	一〇九
昭和十四年	八、〇三	七、四七	一〇七
昭和十五年	六、八五	五、五九	一〇三

(ハ)區別私生児

出生児中私生の割合を區別に見ると最高は四谷の三・九%であつて牛込、向島、荒川(各三・五%以上)之に亞ぎ、最低は目黒の一・二〇%であつて中野、大森、赤坂、杉並、神田(各二・〇〇%以下)等順次相亞ぐ。之を前年に較べると舊市部で麴町、京橋、牛込、小石川、浅草の五區、新市部で大森の一區は稍々増加を見たるも、爾餘の二十八區は何れも減少し、就中四谷に於て著しい。

區別私生児



區名	私生兒		出生百中私生兒	
	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
金澤市	四、四〇〇	四、四〇〇	三・三	三・三
蕪市	一、四〇〇	一、四〇〇	三・三	三・三
神田町	六〇〇	六〇〇	二・九	二・九
日本橋	六〇〇	六〇〇	二・九	二・九
芝	一、二〇〇	一、二〇〇	三・九	三・九
京橋	六〇〇	六〇〇	二・九	二・九
麻布	四〇〇	四〇〇	三・三	三・三
赤坂	三〇〇	三〇〇	二・九	二・九
四谷	六〇〇	六〇〇	三・九	三・九
牛込	八〇〇	八〇〇	三・九	三・九
小石川	九〇〇	九〇〇	三・九	三・九
本郷	九〇〇	九〇〇	三・九	三・九
下谷	二七〇	二七〇	二・九	二・九
淺草	三二〇	三二〇	三・三	三・三
本所	三二〇	三二〇	三・三	三・三
深川	一五〇	一五〇	三・八	三・八
新市部	二、九〇〇	二、九〇〇	三・三	三・三
品川	一、三〇〇	一、三〇〇	二・九	二・九
目黒	九〇〇	九〇〇	二・六	二・六

### 第四章 死産

#### 一、死産數及死産率

區名	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年
荏原	二六	二九	二九	二九
大森	二五	二七	二七	二七
蒲田	二九	二七	二七	二七
世田谷	二二	二二	二二	二二
澁谷	二二	二二	二二	二二
中野	二五	二五	二五	二五
杉並	二八	二八	二八	二八
豊島	二八	二八	二八	二八
瀧野川	二八	二八	二八	二八
荒川	二七	二七	二七	二七
王子	二七	二七	二七	二七
板橋	二七	二七	二七	二七
足立	二七	二七	二七	二七
向島	二七	二七	二七	二七
葛飾	二六	二六	二六	二六
江戸川	二二	二二	二二	二二

昭和十五年本市に於ける死産は九、四九八であつて死産率（人口千に對する死産の割合）は一・四〇に該る。之を前年に較べると、死産數に於て七二八割合に於て〇・〇七の増加である。

尙特殊死産率（出産百に對する死産の割合）は五・六一であつて前年のそれに較べると〇・四七の減少を見た。死産數及特殊死産率を昭和八年以降に就いて見ると、死産數に於ては毎年八千臺を持續して來たが當年は九千臺に累増した。

割合に於ては五・六一乃至六・一一の間に在り當年は昭和八年以降最低を示してゐる。

### 死産果年

年次	死産數	人口	人口千に對する死産率	出産百中死産
昭和六年	八、一五三	五、三九、八八〇	一・五九	五・五五
昭和七年	八、七〇六	五、三二、七〇〇	一・六四	五・八六
昭和八年	八、五〇八	五、四九、四六〇	一・五四	五・九四
昭和九年	八、二六三	五、六八、三七〇	一・四三	六・〇九
昭和十年	八、九三〇	五、八七、六六七	一・五二	五・八二
昭和十一年	八、六六六	六、〇五、八〇〇	一・四三	五・八八

昭和十二年 八、八六七  
昭和十三年 八、五九九  
昭和十四年 八、七〇六  
昭和十五年 九、四九八

（口）區別死産率

特殊死産率を區別に見ると、最高は蒲田の六・七六%であつて、荏原、本所、日本橋、芝、麴町、四谷（各六・〇〇%以上）之に亞ぎ、最低は城東の四・六四%であつて向島、小石川、澁谷（各五・〇〇%以下）順次相亞ぐ。之を前年に較べると舊市部で麴町、日本橋、麻布の三区、新市部で荏原、蒲田、杉並、葛飾の四區は増加、就中麴町に於ては特に著しく、爾餘の二十八區は何れも減少を示してゐる。

### 區別死産

區名	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
金澤市	八、七〇	六、四八	六・〇	六・一
蕪市	二、九〇	二、九〇	三・三	三・三
神田町	三	三	三・六	三・六



神田	一六〇	一四一	六・六	五・三
日本橋	九七	一四一	五・八	六・四
芝橋	一六二	一七	五・六	五・九
京橋	三六	二四	七・三	六・七
麻布	八六	一八	五・九	五・八
赤坂	五	一〇	六・〇	五・八
四谷	八七	八	六・〇	五・八
牛込	一四二	一五	六・九	六・〇
小石川	一七〇	一七	六・六	六・〇
本郷	一七〇	一七	六・六	六・〇
下谷	一七〇	一七	六・六	六・〇
浅草	一七〇	一七	六・六	六・〇
本所	一七〇	一七	六・六	六・〇
深川	一七〇	一七	六・六	六・〇
新市部	一七〇	一七	六・六	六・〇
品川	一七〇	一七	六・六	六・〇
目黒	一七〇	一七	六・六	六・〇
荏原	一七〇	一七	六・六	六・〇
大森	一七〇	一七	六・六	六・〇
蒲田	一七〇	一七	六・六	六・〇
世田谷	一七〇	一七	六・六	六・〇
澁谷	一七〇	一七	六・六	六・〇
淀橋	一七〇	一七	六・六	六・〇

二、死産の月別

中野	六二	六二	五・九	五・三
杉並	六四	三三	五・五	五・四
豊島	六九	四八	五・九	五・九
瀧野川	八六	一六	六・〇	五・八
荒川	五〇	一六	五・五	五・八
王子	三三	一六	六・一	五・八
板橋	三六	一六	六・一	五・八
足立	三六	一六	六・一	五・八
向島	三〇	一六	六・一	五・八
城東	三〇	一六	六・一	五・八
葛飾	三〇	一六	六・一	五・八
江戸川	三〇	一六	六・一	五・八

死産を月別に見ると一月が最も多く十二月、十一月、十月、九月、二月順次相並ぶ、之に反して最も少いのは四月であつて、六月、五月、七月之に並ぶ。即ち死産は最高の一月から順次減少して四月に至り最低となり多少高低はあるが、翌五月より逐月累増しつゝ十二月に至る。之を前年に較べると一月より漸減し當年より一箇月遅

い五月に最低となり翌六月より漸増して十二月に至り逐月移行の様は大體同様である。

死産の月別

一月	八四	九四	一・二	一・三
二月	六四	七六	一・一	一・三
三月	六四	七六	一・一	一・三
四月	五九	六八	一・〇	一・三
五月	五三	六二	一・〇	一・三
六月	六三	六七	一・一	一・三
七月	六九	七三	一・一	一・三
八月	七三	七九	一・一	一・三
九月	八二	八八	一・一	一・三
十月	八九	九三	一・一	一・三
十一月	九六	一〇〇	一・一	一・三
十二月	八七	九七	一・一	一・三

三、死産児の體性 (死産児(男女不詳を除く)を男女に分つと、男五、二

死産児の體性 (男女不詳を除く)

昭和八年	男 四、七〇五	女 三、七三三	女百に付男 二六・四
昭和九年	男 四、四七四	女 三、五七一	二五・三
昭和十年	男 四、九三三	女 三、九五一	二五・二
昭和十一年	男 四、七二五	女 三、九〇四	二〇・七
昭和十二年	男 四、八四一	女 三、九〇〇	二二・九
昭和十三年	男 四、六七三	女 三、六八五	二六・八
昭和十四年	男 四、八八九	女 三、八七	二七・八
昭和十五年	男 五、三三六	女 四、二〇二	二四・九
昭和十六年	男 五、三	女 四、七	二〇・七
昭和十七年	男 四、六	女 三、五	二二・一

四八、女四、二〇二であつて、男は女より一、〇四六多く、女百に付男の割合は一・二四・九に該る。之を前年に較べると男女何れも増加したが男の増加女のそれに比し稍々少い爲、男超過の割合は二・九の減少を見た。尙男女割合を月別に見ると各月共男超過にして、就中四月、九月、三月、八月、七月(各一三〇・〇以上)に於て著しい。



年次	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
公生	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三	三三三
私生	一三四・一	一四〇・四	一四〇・四	一四〇・四	一四〇・四	一四〇・四	一四〇・四	一四〇・四	一四〇・四	一四〇・四
合計	四六七	四七三	四七三	四七三	四七三	四七三	四七三	四七三	四七三	四七三

四、死産児の身分

(イ)死産児の身分  
死産児の身分に就いて見ると公生は七、八一八、私生は一、六八〇であつて公生は總数の八二・三二%、私生は一七・六九%に該り、出生の場合のそれ(公生九七・二〇%、私生二・八〇%)に較べると私生の割合が遙に高いのが注目される。

尙公生、私生の割合を昭和八年以降に就いて見ると公生は逐年漸増し、私生は正にその反對を示してゐる。  
死産児の身分

年次	總數	公生	私生	不詳	公生	私生	不詳
昭和八年	八、五八八	六、三三三	二、二五五	—	七、五八一	一、〇七〇	—
昭和九年	八、三二六	六、〇一九	二、一〇五	—	七、四〇七	九一九	—
昭和十年	八、九三〇	六、七三六	二、一九四	—	七、五〇〇	一、四三〇	—
昭和十一年	八、六六六	六、五八八	二、一八八	—	七、五〇〇	一、一六六	—
昭和十二年	八、八七〇	六、九二二	一九五	—	七、九一七	八五三	—
昭和十三年	八、三九九	六、六七九	一、七〇〇	—	七、三七八	一、〇二一	—
昭和十四年	八、七〇〇	六、九二二	一、七〇〇	—	七、六二二	一、〇七八	—
昭和十五年	九、四九九	七、八八八	一、六一〇	—	八、三三二	一、一六六	—

(ロ)身分別死産児の體性

死産児の身分別に男女の割合を見ると公生は女百に付男一二六・八、私生は女百に付男一一六・六であつて共に男超過なるも超過の割合は公生に高い。  
これは出生の場合(公生一〇六・〇、私生九九・一)に就いて見るもやはり同様である。

又昭和八年以降に就いて見るも十三年(公生一二五・八、私生一三〇・七)の例外を除けば例年變りはない。  
身分別死産児の體性(男女不詳を除く)

年次	公生		私生	
	男	女	男	女
昭和八年	三、四七六	二、七二〇	一、三三九	九一九
昭和九年	三、三六一	二、五九四	一、二二二	九七五
昭和十年	三、七二五	二、九六六	一、〇八八	九六五
昭和十一年	三、六二〇	二、九三三	一、〇三三	九八一
昭和十二年	三、七九七	三、〇〇〇	一、〇三三	八七六
昭和十三年	三、七〇三	二、九四三	一、〇三三	八七六
昭和十四年	三、九三三	三、〇〇〇	一、〇三三	八七六
昭和十五年	四、三三七	三、四九九	一、〇三三	七七五

(ハ)區別私生死産児

死産百中私生の割合を區別に見ると、最高は四谷の二八・七四であつて淺草、蒲田、麻布(各二二・〇〇以上)之に亞ぎ、最低は世田谷の九・二八であつて瀧野川、杉並、目黒(各一五・〇〇)以下順次相亞ぎ、概して舊市部に高く、新市部に低い。

之を前年に較べると舊市部で麻布、赤坂、四谷の三區、新市部で品川、蒲田、澁谷、豊島、板橋、葛飾の六區は増加し爾餘二十六區は何れも減少を示し、就中、板橋、

區別	私生死産		死産百中	
	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
全市	一、六六〇	一、六六〇	一七・九	一七・九
神田	八	九	三三・八	三五・三
本郷	二	二	二二・五	二二・五
日比谷	三	三	二二・五	二二・五
芝	三	三	二二・五	二二・五
京橋	三	三	二二・五	二二・五
麻布	三	三	二二・五	二二・五
赤坂	三	三	二二・五	二二・五
四谷	三	三	二二・五	二二・五
牛込	三	三	二二・五	二二・五
小石川	三	三	二二・五	二二・五
本郷	三	三	二二・五	二二・五
下谷	三	三	二二・五	二二・五
淺草	三	三	二二・五	二二・五
本所	三	三	二二・五	二二・五
深川	三	三	二二・五	二二・五

麹町、下谷、芝、瀧野川に於て著し。



市部	一、二	一、二八	一、六六	一、六八
新市部	六	六	六	六
品川	五	五	五	五
目黒	五	五	五	五
荏原	五	五	五	五
大森	六	六	六	六
蒲田	六	六	六	六
世田谷	七	七	七	七
澁谷	七	七	七	七
中野	七	七	七	七
杉並	七	七	七	七
豊島	七	七	七	七
荒川	七	七	七	七
板橋	七	七	七	七
足立	七	七	七	七
向島	七	七	七	七
葛飾	七	七	七	七
江戸川	七	七	七	七

死産を懷孕月數に依つて分つと七箇月以上のものは五、六〇九(總數の五九・〇五%)七箇月未滿のものは三、八八九(四〇・九五%)である。

之を男女別に就いて見ると七箇月以上は七箇月未滿より多いことは兩者共に一致する所であるが、男は女に較べて七箇月以上の割合に於ては僅かながら低率であるが七箇月未滿に於ては正にその反對を示してゐる。

年次	總數	七箇月未滿		七箇月以上	
		數	率	數	率
昭和八年	八、五八	五、三〇	六一・一	三、二八	三七・九
昭和九年	八、三六	四、九六	五九・三	三、四〇	四〇・七
昭和十年	八、九〇	五、五七	六一・一	三、三三	三七・七
昭和十一年	八、六六	五、三二	六一・一	三、三四	三八・八
昭和十二年	八、八七	五、四〇	六一・一	三、四七	三九・〇
昭和十三年	八、九二	五、二八	五九・三	三、六四	四〇・六
昭和十四年	八、七〇	五、三三	六一・一	三、三七	三八・〇
昭和十五年	九、四九	五、六〇	五八・九	三、八九	四一・一
昭和十五年	五、二八	三、〇八	五八・五	二、二〇	四一・九

男女不詳 一、六 三三・三〇 八七・五〇

### 第五章 出 産

#### 一、出産數及出産率

(イ)出産數

昭和十五年本市に於ける出産(出生と死産との合計)は一六九、一六七であつて、其の中出生は一五九、六六九(總數の九四・三九%)、死産は九、四九八(五・六一%)を占めてゐる。

尙出産率(人口千に對する出産の割合)は二四・九六に該る。

之を前年に較べると出産數に於て二四、四三七、割合に於て二・九七の増加である。

出産數を最近十年間に就いて見ると十三萬臺乃至十五萬臺の間を上下して來たが、當年は十六萬臺に激増した。

次に出産百中出生、死産の割合から見ると、前者は九三・〇%臺乃至九四・〇%臺にあり大體漸減の傾向を帯びて來たが、當年は稍々上昇し昭和六年に亞ぐ激増を見た。

後者は五・〇%臺乃至六・〇%臺であり僅かに漸増の傾向を示したるも當年は可成低下し昭和六年につぐ減少を示してゐる。

年次	總數	出生		死産		人口千に對する出産
		數	率	數	率	
昭和六年	一四七、六三	一三九、四九	九四・三	八、一四	五・七	二四・〇
昭和七年	一四八、六〇	一三九、九四	九四・三	八、六六	五・八	二四・〇
昭和八年	一四三、七〇	一三三、八三	九三・九	九、八七	六・九	二四・〇
昭和九年	一三三、三六	一二五、〇〇	九三・七	八、三六	六・二	二四・〇
昭和十年	一三三、四四	一二四、四四	九三・三	八、〇〇	五・九	二四・〇
昭和十一年	一四七、九四	一三九、三三	九四・二	八、六一	五・九	二四・〇
昭和十二年	一五〇、〇一	一四一、三三	九四・二	八、六八	五・九	二四・〇
昭和十三年	一三七、五五	一三二、一四	九四・九	五、四一	三・九	二四・〇
昭和十四年	一四四、七〇	一三五、九〇	九四・〇	八、八〇	六・一	二四・〇
昭和十五年	一六九、一六	一五九、六六	九四・四	九、五〇	五・七	二四・九

(ロ)區別出産率

出産率を區別に見ると、最高は江戸川の三〇・四〇%であつて向島、城東、足立、荒川(各二九・〇〇%以上)に之に亞ぎ、最低は麴町の一六・二八%であつて日本橋、赤坂、四谷(各一九・〇〇%以下)等順次相亞いで低く、



概して舊市部に低く新市部に高い。

之を前年に較べると新市部の蒲田、板橋の二區は減少し、爾餘の三十三區は何れも増加を示すに至つた。

區名	出 産 數		人口千に付出生産	
	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
全 市	1,661,260	1,661,260	2.9	2.9
舊市部	820,000	820,000	1.6	1.6
新市部	841,260	841,260	1.3	1.3
麹町	8,000	9,000	1.6	1.6
神田	2,360	2,360	1.6	1.6
日本橋	1,651	1,781	1.7	1.7
京 橋	2,861	3,181	1.7	1.7
芝 布	3,255	3,931	1.5	1.5
麻 布	1,559	1,859	1.7	1.7
赤 坂	916	1,006	1.5	1.5
四 谷	1,277	1,397	1.6	1.6
牛 込	2,500	2,975	1.9	1.9
小石川	2,996	3,822	3.0	3.0
木 郷	2,632	3,097	1.8	1.8
下 谷	3,566	4,336	2.7	2.7
淺 草	5,501	6,886	2.8	2.8

區名	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
本 所	6,059	6,801	1.9	1.9
深 川	5,141	5,999	2.3	2.3
新市部	1,015,000	1,293,333	2.3	2.3
品 川	4,897	5,419	3.0	3.0
目 黒	4,400	5,181	3.0	3.0
荏 原	4,407	5,087	3.0	3.0
大 森	5,805	7,086	3.5	3.5
蒲 田	5,006	6,691	2.9	2.9
世 田 谷	5,788	6,899	3.3	3.3
澁 谷	5,098	5,464	3.0	3.0
中 野	4,697	4,349	3.0	3.0
杉 並	4,771	5,811	3.5	3.5
豊 島	5,218	5,804	3.0	3.0
荒 川	6,475	7,428	3.3	3.3
板 橋	2,866	3,374	3.3	3.3
足 立	8,559	10,100	3.6	3.6
向 島	5,550	6,855	3.6	3.6
葛 飾	5,866	6,533	3.6	3.6
江 戸 川	4,640	5,590	3.0	3.0

## 二、複 産

### (イ)複産件數

昭和十五年本市に於ける複産は一、〇四〇であつて、分娩數に對する複産の割合は六・一九%に該る。之を前年に較べると數に於て一八〇の増加を示したる

年 次	複 産 件 數	分 娩 數	單 産	總 數
昭和八年	1,038	17,588	17,585	755
昭和九年	1,338	23,648	23,310	738
昭和十年	1,550	25,509	23,959	851
昭和十一年	1,713	27,143	25,430	913
昭和十二年	1,931	29,301	27,370	931
昭和十三年	2,167	31,766	29,600	967
昭和十四年	2,381	34,861	32,480	1,001
昭和十五年	2,610	37,810	35,200	1,010

### (ロ)産兒の體性別複産

複産を産兒の體性に依つて分つと雙兒に在りては、二兒共に男の場合が最も多く四三八(雙兒總數百中四二・四)を計へ、二兒共に女の場合が三七〇(三五・八)で

年 次	複 産 件 數		分 娩 千 中		複 産 百 中	
	雙 兒	三 兒	單 産	複 産	雙 兒	三 兒
昭和八年	77	6	997.3	5.7	99.2	0.8
昭和九年	76	6	994.1	5.9	99.3	0.8
昭和十年	82	7	994.7	5.3	99.2	0.8
昭和十一年	79	7	994.5	5.5	99.1	0.9
昭和十二年	86	7	994.3	5.7	99.2	0.8
昭和十三年	85	7	994.0	5.9	99.1	0.9
昭和十四年	85	9	994.0	5.9	99.0	1.0
昭和十五年	103	7	993.8	6.2	99.3	0.7

之に亞ぎ、一男一女の場合は二二四(二一・七)で他に較べて甚だ少い。三兒に在りては三兒共に女の場合が最も多く三(三兒總數百中四二・八)を計へ、三男及一男二女の場合は何れも二二八・六で同率を示してゐる。

も割合に於ては却つて〇・二一%の減少を見た。

次に複産中雙兒は一、〇三三(複産百中九九・三)で三兒は僅かに七(〇・七)に過ぎない。即ち複産の大部分は雙兒であつて之を既往に就いて見ると常に同様の態様を示してゐる。



要するに雙兒、三兒共に産兒の何れも同性なる場合が大部分を占め、之を既往に就いて見るもやはり同様の態

産兒の體性別複産數 (體性不詳を除く)

年次	雙兒		三兒		總數百中
	男	女	男	女	
昭和八年	三二五	二七〇	三三二	二八三	三三・五
昭和九年	三三〇	二六六	三三七	二七九	三三・九
昭和十年	三三三	二六六	三三七	二七九	三三・九
昭和十一年	三三三	二六六	三三七	二七九	三三・九
昭和十二年	三三三	二六六	三三七	二七九	三三・九
昭和十三年	三三三	二六六	三三七	二七九	三三・九
昭和十四年	三三三	二六六	三三七	二七九	三三・九
昭和十五年	三三三	二六六	三三七	二七九	三三・九

### 三、複産兒數

#### (イ)複産兒の出生及死産

複産に依る産兒數は二、〇八七であつて出産總數一六九、一六七の一・二%に該る。

複産兒を出生、死産に分つと出生は一、八〇五であつて複産總數の八六・五%に該り、死産は僅かに二八二(一

様である。

### 單産兒及複産兒の出生及死産

年次	單産兒		複産兒		實數	百分比
	出生	死産	出生	死産		
昭和十四年	一、八〇五	二八二	一、五二三	一、〇〇〇	一、五二三	八六・五
昭和十五年	一、八〇五	二八二	一、五二三	一、〇〇〇	一、五二三	八六・五

#### (ロ)身分及出生、死産別複産兒數

複産兒の身分に依つて分つと公生は一、九九八であつて、其中出生は一、七六九(八八・五%)、死産は二二九(一一・五%)を計へ、私生は八九であつて其中出生は三六(四〇・四%)、死産は五三(五九・六%)を示し、私生に於ける死産の割合は公生に於けるそれよりも遙に高い。

之を前年に較べると私生に於ける出生は稍々減少したるも、死産は増加した。

身分及出生、死産別複産兒數

三・五%)に過ぎない。之を前年に較べると出生の割合は増加し死産の割合は減少した。

複産兒の出生、死産を單産のそれに較べると死産は遙かに高く、複産兒死産の危険は單産の場合に較べて著しい事が窺はれる。

年次	總數		公生		私生		實數	百分比
	出生	死産	出生	死産	出生	死産		
昭和十四年	一、七六九	二二九	一、六二九	一、九八	一、一四〇	一、〇〇〇	一、五二三	八六・五
昭和十五年	一、七六九	二二九	一、六二九	一、九八	一、一四〇	一、〇〇〇	一、五二三	八六・五

### 第六章 死亡

#### 一、死亡數及死亡率

(イ)死亡數  
昭和十五年本市に於ける死亡は八三、五〇七であつて一日平均二二・八となり、死亡率(人口千に對する死亡の割合)は一一・三に該る。

之を前年に較べると死亡數に於て六、六六二、割合に於て一・四を減じた。

死亡數を最近十年間に就いて見ると昭和八年の八萬臺



を除けば十年迄は七萬臺を持続して来たが、翌十一年以降八萬臺に果増し、十四年には九萬をも突破し、前年に見ざる多數を計へるに至つた。

然るに當年は再び八萬臺に逆轉した。

死亡率からこれを見ると毎年一三・〇%臺乃至一五・〇%臺の間にあつたが當年は一三・〇%臺に下り、昭和六年に較べると二・七%の低率を見るに至つた。

死亡累年

年次	死亡數	人口	人口千に付死亡
昭和六年	六,二二一	五,一三九,八九〇	一五・〇
昭和七年	七,〇九六	五,三三三,七〇〇	一三・〇
昭和八年	八,三三九	五,四九五,四六〇	一五・二
昭和九年	七,八八六	五,六八三,三七〇	一三・九
昭和十年	六,〇七四	五,八七五,六六七	一〇・三
昭和十一年	八,〇八六	六,〇八五,八〇〇	一三・三
昭和十二年	八,三六四	六,三三三,〇〇〇	一三・〇
昭和十三年	八,八七九	六,四七三,六〇〇	一三・八
昭和十四年	六,一六九	六,八八一,二〇〇	八・九
昭和十五年	六,五〇七	六,七六,八〇〇	九・七

(口)區別死亡率

區名	死亡數	人口	人口千に付死亡
麻布	一,一〇四	二,三三三	二・九
赤坂	六三四	二,一七七	二・九
四谷	九五四	二,三三四	四・〇
牛込	一,一六五	二,五八八	四・五
小石川	一,一三五	二,一八〇	五・三
本郷	一,八三三	二,一六〇	八・五
下谷	二,三〇四	二,三三七	九・七
浅草	四,〇一一	二,五五〇	一五・七
本所	三,八九五	二,三六七	一六・四
深川	三,四〇〇	二,四〇一	一四・一
新市部	五,七七〇	二,三三三	二四・七
品川	二,九八八	二,一八七	一三・七
目黒	三,三九九	二,三三三	一四・五
荏原	三,六〇五	二,三三三	一五・四
大森	三,一〇六	二,三三三	一三・三
蒲田	三,八八八	二,八三三	一三・七
世田谷	三,一七七	二,七三三	一一・六
澁谷	三,二三三	二,八三三	一一・四
中野	三,五五五	二,九三三	一二・一
杉並	三,六七七	三,〇三三	一二・一
豊島	四,〇八八	三,一三三	一三・〇
瀧野川	一,九四四	一,〇四四	一八・六

死亡率を區別に見ると最高は板橋の一七・一〇%であつて足立、向島(各一四・〇〇%以上)荒川、城東、深川、本所、葛飾、牛込、江戸川、瀧野川(各一三・〇〇%以上)之に亞ぎ、最低は日本橋の九・五九%であつて、麹町、世田谷(各九・〇〇%以上)順次相亞ぎ、一般に舊市部の諸區は新市部の諸區に較べて死亡率は低い。之を前年に較べると、舊市部で麹町、神田、日本橋、京橋、下谷、本所の六區は何れも高率を示し、爾餘の九區及び新市部の全部は低率を示してゐる。

區別死亡

區名	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
	死亡數	死亡數	人口千に付死亡	人口千に付死亡
荒川	五,五九四	四,八九九	一五・五	一五・九
王子	三,九七〇	三,七一一	一四・六	一三・三
板橋	三,九四六	三,九七七	一三・〇	一四・一
足立	三,五九九	三,四〇〇	一三・七	一三・〇
向島	三,一八四	二,九三四	一三・五	一三・二
葛飾	三,〇二二	二,六六六	一三・六	一三・八
江戸川	二,二一六	二,〇五三	一六・九	一三・四
瀧野川	二,六六一	二,三四〇	一七・七	一三・〇
日本橋	一,七〇六	一,六〇四	九・〇	九・五
日本橋	一,七〇六	一,六〇四	九・〇	九・五
芝	二,三六五	二,一五五	一〇・八	一〇・七

二、死亡の月別

死亡を月別に見ると一月最も多く、二月、三月、四月之に亞ぎ、最も少いのは十月であつて九月、十一月、六月、五月順次相亞いでゐる。即ち一月以降逐月遞減し七、八月僅かに上昇するも翌九月より再び低下しつゝ十月最低となり、十一月再び増加に轉じつゝ十二月に至る。前年に較べると最低は四ヶ月早い六月であつて尙逐月移行は大體同様の態様を示してゐる。

死亡の月別

月次	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
	死亡數	死亡數	千とす平均死亡指數	千とす平均死亡指數
一月	一〇,一六九	八,七〇四	一〇〇・一	一〇〇・一
二月	一〇,一六九	八,七〇四	一〇〇・一	一〇〇・一
三月	一〇,一六九	八,七〇四	一〇〇・一	一〇〇・一
四月	一〇,一六九	八,七〇四	一〇〇・一	一〇〇・一
五月	一〇,一六九	八,七〇四	一〇〇・一	一〇〇・一
六月	一〇,一六九	八,七〇四	一〇〇・一	一〇〇・一
七月	一〇,一六九	八,七〇四	一〇〇・一	一〇〇・一
八月	一〇,一六九	八,七〇四	一〇〇・一	一〇〇・一
九月	一〇,一六九	八,七〇四	一〇〇・一	一〇〇・一
十月	一〇,一六九	八,七〇四	一〇〇・一	一〇〇・一
十一月	一〇,一六九	八,七〇四	一〇〇・一	一〇〇・一
十二月	一〇,一六九	八,七〇四	一〇〇・一	一〇〇・一



月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
死亡者数	八、七〇〇	七、三六六	八、六三三	七、六三九	七、一七二	六、四七五	六、九二四	七、六二九	六、六四一	六、七三三	六、八八六	八、七七七
男	四、七二一	四、〇九七	四、五七〇	四、〇七二	三、九七二	三、八七二	四、〇〇〇	四、九一五	四、八二一	四、八八二	五、〇五五	七、二五一
女	三、九七九	三、二六九	四、〇六三	三、五六七	三、二〇〇	二、六〇三	二、九二九	二、七一四	一、八二〇	一、九〇四	一、八〇四	一、五二六
男百に付男	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

### 三、死亡者の體性

死亡者を男女に分つと男四四、八三二、女三八、六七五であつて男は女より六、一五七多く、女百に付男の割合は一一五・九に該る。

之を既往に就いて見るに常に男超過であつて、昭和八年の一・一六・三を除けば一一四・〇を臺を中心として上下してゐる。

尙男女の割合を月別にみると各月共男超過にして就中

四月、一月、三月、六月、二月に於て著しい。

年次	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年
男	四、七二一	四、〇九七	四、五七〇	四、〇七二	三、九七二	三、八七二	四、〇〇〇	四、九一五
女	三、九七九	三、二六九	四、〇六三	三、五六七	三、二〇〇	二、六〇三	二、九二九	二、七一四
男百に付男	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

### 四、死亡者の配偶關係

死亡者の配偶關係を見ると未婚者（四〇、六四八）が最も多く、死亡者總数の四八・七%を占め、有配偶者（二五、二二五）の三〇・二%に亞ぎ、死別者（一四、四八三）の一七・三%、離別者（八四四）の一・〇%の順である。

之を前年に較べると離別者は同率、死別者、有配偶者は共に増加し、未婚者は減少してゐる。

更に死亡者の配偶關係を男女別に見ると男は女に較べて未婚者、有配偶者、殊に有配偶者の割合が高く、女は男に較べて死別者の割合が高い。

離別者の割合に於ては同率を示してゐる。

#### 死亡者の配偶關係

年次	總數	未婚	有配偶	死別	離別	身分不詳
昭和八年	八三、三三三	四三、三三三	三〇、七三三	一、七三三	八〇七	三、五五五
昭和九年	七九、八八六	四三、三三三	三二、一六四	二、一六四	九〇〇	三、九五五

年次	總數	未婚	有配偶	死別	離別	身分不詳
昭和十年	九〇、七〇〇	四三、三三三	三〇、三三三	一、七三三	八三九	四、〇〇〇
昭和十一年	八〇、八三三	四一、五九九	三三、〇九九	一、九九九	八七二	三、五五五
昭和十二年	八八、八八六	四四、九九九	三三、〇九九	一、九九九	七二五	三、五五五
昭和十三年	九〇、二九九	四四、五五五	三三、〇九九	一、九九九	八〇〇	三、五五五
昭和十四年	九〇、二九九	四四、五五五	三三、〇九九	一、九九九	九〇八	三、五五五
昭和十五年	八三、三三三	四三、三三三	三〇、七三三	一、七三三	八四四	三、五五五

年次	總數	未婚	有配偶	死別	離別	身分不詳
昭和八年	一〇〇・〇	五五・五	二五・二	一・一	四・二	〇・〇
昭和九年	一〇〇・〇	五三・〇	二六・五	一・三	五・〇	〇・〇
昭和十年	一〇〇・〇	五〇・〇	二五・九	一・一	五・〇	〇・〇
昭和十一年	一〇〇・〇	四八・一	二七・八	一・一	五・〇	〇・〇
昭和十二年	一〇〇・〇	四九・九	二七・六	一・一	五・〇	〇・〇
昭和十三年	一〇〇・〇	四九・九	二七・六	一・一	五・〇	〇・〇
昭和十四年	一〇〇・〇	四九・九	二七・六	一・一	五・〇	〇・〇
昭和十五年	一〇〇・〇	四八・七	二七・〇	一・〇	五・三	〇・〇



離別	八四	四八	五九	一〇	一〇	一〇
身分不詳	三、七〇七	一、五八六	九三二	二八	三、一	二、四

五、乳児死亡

(イ)乳児死亡数

一歳未満の乳児死亡者は一一、一八九であつて一日平均三一となり総死亡数の一三・四〇%又乳児死亡率(出生百に對する乳児死亡の割合)は七・〇%に該る。之を前年に較べると死亡數に於て一、三一四、乳児死亡率に於て二・一九%の減少である。乳児死亡率を昭和八年以降に見るに大體に於て逐年減少を辿り當年は例年にない低率を示すに至つた。

年次	死亡總數	乳児死亡總數	出生百に對し乳児死亡
昭和八年	八、三九九	一、五八三	二一・七
昭和九年	七、八三六	一、五五五	一九・九
昭和十年	九、〇七四	一、〇〇四	一一・一
昭和十一年	八、八八六	一、三六三	一五・三
昭和十二年	八、六四四	一、三三三	一五・三
昭和十三年	八、八七九	一、三六〇	一五・三

(ロ)區別乳児死亡率

乳児死亡率を區別に見ると最高は足立の八・九三%であつて城東、深川、板橋、本所、向島(各八・〇〇%以上)之に亞ぎ、最低は世田谷の四・五六%であつて、麹町、赤坂、麻布、中野(各五・二〇%以下)順次相亞ぐ。之を前年に較べると舊市部で麹町の一區は僅かに増加し、爾餘の三十四區は何れも減少した。

區名	乳児死亡		出生百に付乳児死亡	
	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
荒川	九、一六九	三、五〇五	一三・八七	九・三〇
板橋	八、五〇七	二、一八八	二五・〇〇	七・〇一
市部	三、三三三	二、一八八	九・〇〇	七・〇一
芝	三、三	三、六	八・七	六・三〇

麻布	九五	九〇	六・五	五・五
赤坂	六〇	七	六・九	四・九
四谷	一五	九	九・九	七・三
牛込	二五	九	八・九	六・七
小石川	二六	二〇	九・六	六・二
本郷	二八	二一	七・九	五・五
下谷	二八	二一	八・〇	六・八
浅草	二八	二一	七・九	六・八
本所	二八	二一	七・九	六・八
深川	二八	二一	七・九	六・八
新市	二八	二一	七・九	六・八
品川	二八	二一	七・九	六・八
目黒	二八	二一	七・九	六・八
荏原	二八	二一	七・九	六・八
大森	二八	二一	七・九	六・八
蒲田	二八	二一	七・九	六・八
世田谷	二八	二一	七・九	六・八
澁谷	二八	二一	七・九	六・八
中野	二八	二一	七・九	六・八
杉並	二八	二一	七・九	六・八
豊島	二八	二一	七・九	六・八
瀧川	二八	二一	七・九	六・八

(ハ)乳児死亡の月別

乳児死亡者を月別に見ると最も多いのは一月であつて二月、三月、十二月順次相亞ぎ最も少いのは九月であつて十月、八月之に亞ぐ。即ち乳児死亡は多少の高低はあるが大體一月より漸減して九月に最低となり、翌十月より漸増して十二月に至る。

之を前年に就いて見るも一月より漸減し當年より一ヶ月先の八月に最低となり、九月より増加を重ねつゝ十二月に至り激増を示してゐる。

乳児死亡の月別



乳児死亡数  
一年一日平均乳児死亡を千とする各月の指数

月次	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
一月	三、三〇〇	二、一〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
二月	一、七〇〇	一、七〇〇	一、七〇〇	一、八五二
三月	一、三九〇	一、五六八	一、三九〇	一、五〇〇
四月	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇
五月	一、〇一六	七三三	九七七	六二五
六月	七三三	七二八	七三三	六二五
七月	七三三	六七七	六七七	六〇九
八月	六六六	六七七	五九九	六二五
九月	六三三	五七七	六三三	六〇七
十月	七〇六	五九〇	六六六	六三三
十一月	九二二	七三三	六六六	六三三
十二月	一、七〇〇	一、三三三	一、六七一	一、三三三

(二)乳児死亡の體性  
乳児死亡者一一、一八九中男六、二五四、女四、九三五であつて男は女より一、三一九多く女百に付男の割合は一二六・七に該る。之を前年に較べると男の減退女のそれより大なる爲割合は却つて〇・六だけ減少した。

死亡乳児の體性

年次及月	男		女		女百に付男	
	男	女	男	女	男	女
昭和八年	八、八〇〇	七、〇三九	三三三・三	二七六・六	一〇七・七	一〇六・八
昭和九年	七、六九六	六、五五六	三二七・七	二七六・六	一〇六・八	一〇六・八
昭和十年	七、七六六	六、三〇六	三三三・三	二七六・六	一〇七・七	一〇六・八
昭和十一年	七、五〇〇	六、〇〇三	三二七・七	二七六・六	一〇七・七	一〇六・八
昭和十二年	七、七三三	六、〇八八	三二七・七	二七六・六	一〇七・七	一〇六・八
昭和十三年	七、〇〇〇	五、五〇〇	三二七・七	二七六・六	一〇七・七	一〇六・八
昭和十四年	六、三三三	四、九三三	三二七・七	二七六・六	一〇七・七	一〇六・八
昭和十五年	六、六六六	五、二二二	三二七・七	二七六・六	一〇七・七	一〇六・八
一月	六六六	五、二二二	三二七・七	二七六・六	一〇七・七	一〇六・八
二月	七三三	五、二二二	三二七・七	二七六・六	一〇七・七	一〇六・八
三月	七三三	五、二二二	三二七・七	二七六・六	一〇七・七	一〇六・八
四月	五〇〇	三、九三三	二八〇・〇	二二二・二	一〇七・七	一〇六・八
五月	四三三	三、三三三	二八〇・〇	二二二・二	一〇七・七	一〇六・八
六月	五九九	三、三三三	二八〇・〇	二二二・二	一〇七・七	一〇六・八

既往に就いて見るに常に男超過にして一二〇・〇を保持してゐる。  
尙男女の權衡を月別に見ると何れの月も男超過にして就中八月、十一月、十月に於て著し。

月次	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
一月	四〇〇	二、一〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
二月	三〇〇	一、七〇〇	一、七〇〇	一、八五二
三月	二〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、五〇〇
四月	一〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一、三〇〇
五月	七〇〇	七三三	九七七	六二五
六月	七三三	七二八	七三三	六二五
七月	七三三	六七七	六七七	六〇九
八月	六六六	六七七	五九九	六二五
九月	六三三	五七七	六三三	六〇七
十月	七〇六	五九〇	六六六	六三三
十一月	九二二	七三三	六六六	六三三
十二月	一、七〇〇	一、三三三	一、六七一	一、三三三

第七章 人口の自然増加

一、人口の自然増加

(イ)人口の自然増加

昭和十五年本市に於ける人口の自然増加數(出生、死亡の差増)は七六、一六二であつて、一日平均二〇八となり、人口自然増加率(人口千に對する自然増加の割合)は一・二四に該る。

之を前年に較べると數に於て三〇、三七一、割合に於て四・二八%の激増である。

人口の自然増加數を最近十年間に就いて見ると昭和六年七年には六萬臺であつたが、八年には五萬臺、更に九年には四萬臺に下つた。

翌十年再び六萬臺に恢復したが、十一年、十二年には五萬臺、更に十三年には日支事變の影響に據るか四萬臺になり例年に見ざる低下を見るに至つた。

然るに、事變下とは云へ十四年の四萬臺以降累増を來たし、當年には一躍七萬を突破し前年に見ざる激増を示すに至つた。

これは一に出生の激増と死亡の激減に依るものであらう。

次に人口の自然増加率から見ると昭和六年、七年の一・〇〇%臺から八年九・〇〇%臺、九年八・〇〇%臺と漸次低下して來たが十年には逆轉して一・〇〇%臺に恢復した。

然るに翌十一年、十二年には再び九・〇〇%臺に落ち更に十三年、十四年には六・〇〇%臺と可成下つたが、當年は十年に亞ぐ激増を見るに至つた。

人口の自然増加率

年次	出生	死亡	自然増加	人口千に付自然増加
昭和六年	一、五九、四二九	一、五二、二二二	六、二〇七	一・〇〇



(口) 区別自然増加率

昭和七年	一五九、五五〇	七二、〇九六	六六、八五八	三三、六
昭和八年	一四八、八五九	八三、五九〇	五三、四九〇	九、五五
昭和九年	一三三、三〇〇	七九、八三六	四三、四七四	八、〇〇
昭和十年	一四四、四二四	九〇、七〇四	六六、五〇〇	一一、二九
昭和十一年	一五九、三三三	八〇、八三六	五七、四七	九、九〇
昭和十二年	一四一、三三三	八〇、八三六	五七、四七	九、九〇
昭和十三年	一三九、一四六	八八、八七九	四〇、三六七	六、三
昭和十四年	一五三、九六〇	九〇、二六九	五七、九七一	六、六六
昭和十五年	一五九、六六九	八三、五〇七	五七、二六二	一一、三

人口の自然増加率を区別に見ると最高は江戸川の一五・五％であつて、王子、向島、城東(各一四・四〇％以上)之に亞ぎ、最低は麴町の五・五二％であつて赤坂、四谷、日本橋(各七・〇〇％以下)順次相亞ぎ、概して舊市部に低く、新市部に高き。

之を前年に較べると何れも増加し、就中舊市部で小石川、深川の二區、新市部で瀧野川、荒川、王子、足立、向島、城東の六區は(各五・〇〇％以上)増加し特に著しい。

区別自然増加數

區名	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
區市部	一、五二	一、五二	六、六六	一一、〇
總市部	二、〇三	二、九七	四、四	八、八
神田	三、八	三、三	五、七	五、三
日本橋	七、四	一、七九	五、三	九、〇
京橋	九、七〇	六、六	六、〇	六、六
芝布	七、七	一、五三	三、九	七、五
赤坂	三、七	六、六	三、九	七、八
四谷	三、〇	四、〇	三、六	六、一
小石川	六、三	一、二八	四、六	六、一
本郷	六、三	一、四一	四、五	八、七
浅草	一、〇	一、七	四、〇	九、四
深川	一、七	三、三〇	五、〇	九、六
新市部	一、五九〇	二、三九〇	八、六	三、〇
品川	一、五九〇	二、三九〇	七、三	九、九〇
目黒	一、六	二、六二	九、六	一、一

(ハ) 自然増加の月別

区名	昭和十四年	昭和十五年
荏原	一、五二	二、三
大森	三、八七	三、〇
蒲田	三、二五	三、七
世田谷	三、三	三、三
澁谷	一、六	一、三
中野	一、三	一、〇
杉並	二、一	二、〇
豊島	二、〇	二、〇
瀧野川	七、七	一、一
荒川	三、〇	二、一
王子	三、〇	二、〇
板橋	三、二	三、七
足立	一、六	一、三
向島	一、六	一、三
城東	一、三	一、三
葛飾	一、三	一、三
江戸川	一、六	一、三

人口の自然増加率を月別に見ると最も多いのは一月であつて十一月、十月、九月、三月順次相亞ぎ何れも一年一日平均を千とする各月の指數は千以上を示し、之に反

して最も少いのは五月であつて、七月、六月、八月、四月、十二月、二月之に亞ぎ何れも各月の指數は千に満たない。即ち起伏に多少の變化はあるが一月より逐月減少を続け五月に最少となるが翌六月より累増して十一月に至る然るに十二月には低下を示してゐる。

この逐月移行の態様は高低に多少の相違はあるが前年と大體同様である。

自然増加の月別

月次	昭和十四年	昭和十五年	昭和十四年	昭和十五年
一月	一、五二	一、五二	一、〇〇	一、〇〇
二月	一、八	一、八	一、一	一、一
三月	一、七九	一、七九	一、一	一、一
四月	一、七九	一、七九	一、一	一、一
五月	一、〇	一、〇	一、一	一、一
六月	一、〇	一、〇	一、一	一、一
七月	一、五	一、五	一、一	一、一
八月	一、五	一、五	一、一	一、一



九月	四、六八	六、八八	一、二〇九
十月	三、六五	七、六九	一、〇四四
十一月	七、二五	九、五五	一、八八〇
十二月	一、〇〇	三、三五	二、三六

二、男女人口の自然増加

人口の自然増加数七六、一六二を男女に分つと男三七、二七〇、女三八、八九二であつて、女は男より一、六二二多く女百に付男の割合は九五・八に該る。

尙男女別自然増加率(男女別人口千に對する男女別自然増加の割合)は男一〇・六六、女一一・八四であつて女の自然増加率が高く、既往に就いて見るも常に同様の態様を示してゐる。

更に男女の權衡を月別に見ると八月、九月、十月、十一月、十二月は男超過、他の月は何れも女超過を示し、就中十二月に於て著し。

男女人口の自然増加率

年次及月	男	女	女百に付男	自然増加率(各性人口千に付)
昭和五年	三、〇〇	三、三三	一〇七・七	二二・七

昭和六年	三、五七	三、七二	九八・五	二二・一
昭和七年	三、五〇	三、八八	一〇〇・五	二二・三
昭和八年	三、七五	三、九八	一〇六・九	二二・六
昭和九年	三、三三	三、九二	一〇八・九	二二・七
昭和十年	三、九七	三、五五	九七・七	二〇・六
昭和十一年	三、九八	三、〇九	九四・六	一八・九
昭和十二年	三、二七	三、〇三	八九・三	一八・九
昭和十三年	二、九八	三、〇九	九四・〇	二〇・二
昭和十四年	三、〇九	三、三三	一〇六・〇	二二・七
昭和十五年	三、七〇	三、八八	一〇四・八	二二・八
一月	六、四〇	七、八三	一〇六・六	二二・八
二月	三、七〇	三、〇七	八二・三	一八・三
三月	三、三〇	三、三六	九〇・八	二〇・九
四月	一、九〇	二、五〇	一〇二・八	二二・七
五月	一、九一	一、八九	八四・〇	一八・〇
六月	一、九〇	二、一四	九二・七	二〇・七
七月	一、八〇	一、八八	九九・九	二二・二
八月	三、三三	三、二六	一〇三・〇	二二・六
九月	三、四三	三、六四	一〇三・五	二二・八
十月	三、九四	三、七五	一〇四・八	二二・九
十一月	四、八二	四、七五	一〇一・六	二一・八
十二月	二、九八	二、三六	一三〇・六	二八・六

〔附〕

一、人口の移出入概況

一、移入人口

(イ)移入人口及其の前住地

昭和十五年中本市各區への移入人口總数は五六一、〇二五であつて總移入率(全市人口千に對する各區移入人口總数の割合)は八二、七六に該る。之を前住地別に見ると本市内他區よりの移入二一六、三二三(總移入の三八・五六%)と本市以外の地域よりの移入三四四、七〇二(六一・四四%)とに大別し得る。而して前者は本市人口の増減に關係はなく、後者は、本市外部よりの轉入者であつて本市人口増加の主要因をなすものである。この純移入人口の全市人口千に對する割合を純移入率と名付けると純移入率は五〇・八五に該る。

更に純移入人口を地域別に見ると道他府縣よりの移入三二一、六五一(純移入人口の九三・三二%)が大部分を占め、本府内他市町村よりの移入一〇、六〇〇(三・〇八

%)と外地外國よりの移入二二、四五二(三・六一%)とは極めて少數である。

前住地別移入人口

各區移入總數	人員	百分比	千人に付
本市内他區より	二一六、三二三	三八・五	二一・六
本市以外の地域より	三四四、七〇二	六一・四	三四・四
本府内他市町村より	一〇、六〇〇	一・八	一・〇
道他府縣より	三三、三五一	五・九	三・三
外地外國より	二、三五二	〇・四	〇・二

(ロ)移入人口の男女割合

移入人口總數中男三〇〇、六四五、女二六〇、三八〇であつて男は女より四〇、二六五多く女百に付男の割合は一一五・四に該る。

之を前住地別に見れば本市内他區よりの移入にありては女百に對し男の割合は一一二・四で本市以外の地域よりの移入にありては一一七・六であつて外來者の男超過の割合は前者より稍、高く。

而して後者の中本府内他市町村よりの移入は女百に付



男一五・八、道他府縣よりの移入は一六・七であるが、外地外國よりの移入は一三九・一であつて男超過は極めて高率である。

移入人口の男女割合

各區移入總數	男女	
	男	女
本市内他區より	二二,四六五	二〇,八八八
本市以外の地域より	一六六,一八〇	一六六,三三三
本府内他市町村より	三,六六七	四,九三三
道他府縣より	一七,三三九	一六,〇〇三
外地外國より	七,二四四	五,一〇七

(ハ)區別移入人口

人口の移入状況を區別に見ると最も多いのは蒲田の三三、九一〇であつて世田谷、大森、杉並、荒川、豊島(各二五、〇〇〇以上)之に並ぎ、之に反して最も少いのは赤坂の四、〇四二であつて麹町、麻布、日本橋(各七、〇〇〇以下)順次相亞ぐ。かくて舊市部に於ては一五一、七九五、新市部に於ては四〇九、二三〇の移入人口を計へ、新市域は舊市域に比し遙に多い。

區名	總移入	本市内	本市以外
淺草	一四,五六六	一〇,三九八	三,一六八
本所	一六,三六六	一〇,八〇八	五,五五八
深川	一五,三一九	一三,二一〇	二,一〇九
新市部	四九,〇〇〇	三三,一八六	一五,八一四
品川	一六,五〇六	七,一五五	九,三五二
目黒	三二,四七七	八,八七〇	二三,六〇七
荏原	一六,二二二	五,七二二	一〇,五〇〇
大森	三七,六四五	一一,三三六	二六,三〇九
蒲田	三三,九一〇	八,一五七	二五,七五三
世田谷	三三,九一〇	一一,〇三三	二二,八七七
澁谷	一八,五七九	七,八五二	一〇,七二七
中野	二四,九〇〇	六,三三三	一八,五六七
杉並	三三,三七四	八,七三二	二五,〇四二
豊島	三三,三三三	九,九二二	二三,四一一
荒川	二二,三二二	四,七六五	一七,五五七
板橋	三三,三三三	八,七三二	二四,六〇一
足立	一七,六二〇	六,九三二	一〇,六八八
向島	一三,三三七	五,四九七	七,八四〇
葛飾	一三,八二二	六,八三三	七,〇八九

更に之を各區別人口に對比すると移入率(人口千に對する移入の割合)の最高は蒲田の一三四・一四であつて江戸川、四谷(一一〇・〇〇以上)之に並ぎ、最低は淺草の五三・〇一であつて、芝、神田、本所、本郷(各六〇・〇以下)順次相亞ぐ、概して舊市部に低く新市部に高い。

移入人口

區名	總移入	本市内	本市以外
下谷	一三,五六六	一〇,三九八	三,一六八
本郷	一三,三三七	一〇,八〇八	二,五二九
小石川	一三,〇〇〇	一〇,五〇〇	二,五〇〇
牛込	一三,〇〇〇	一〇,五〇〇	二,五〇〇
四谷	一三,〇〇〇	一〇,五〇〇	二,五〇〇
赤坂	四,〇四二	三,〇〇〇	一,〇四二
麻布	七,〇〇〇	六,〇〇〇	一,〇〇〇
芝	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇	一,〇〇〇
京橋	一〇,〇〇〇	九,〇〇〇	一,〇〇〇
日本橋	七,〇〇〇	六,〇〇〇	一,〇〇〇
神田	七,〇〇〇	六,〇〇〇	一,〇〇〇
麹町	四,〇四二	三,〇〇〇	一,〇四二
市部	三三,一八六	二六,三〇九	六,八七七
豊島	二五,〇〇〇	一九,〇〇〇	六,〇〇〇
荒川	一七,五五七	一三,〇〇〇	四,五五七
板橋	二四,六〇一	一八,〇〇〇	六,六〇一
足立	一〇,六八八	八,〇〇〇	二,六八八
向島	七,八四〇	六,〇〇〇	一,八四〇
葛飾	七,〇八九	五,〇〇〇	二,〇八九

江戸川 一三,七四四 八,七三二 五,〇一二

二、移出人口

(イ)移出人口及其の轉住地

昭和十五年本市各區よりの移出人口總數は四四二、五五九であつて總移出率(全市人口千に對する各區移出人口總數の割合)は六五・二九に該る。これを轉住地別に見るに本市内他區への移出は二一六、三三三(總移出の四八・八八%)であつて本市以外の地域への移出は二二六、二二六(五一・一一%)である。

而して前者は本市人口の増減に關係なく、後者は本市以外への轉住者であつて、本市人口減少の主要因をなすものである。この純移出人口の全市人口千に對する割合を純移出率と名付けると、純移出率は三三・五二に該り、純移入率に較べて著しく低調にある。

更に純移出人口を地域別に分つと本府内他市町村への移出は一一、三二二(純移出人口の五・四五%)、道他府縣への移出は二二〇、〇二五(九二・八三%)、外地外國への移出は三、八九〇(一・七二%)であつて道他府縣へ



の移出が大部分を占めてゐる。

轉住地別移出人口

人員	百分比	千人に付
各區移出總數	100.0	100.0
本市内他區へ	36.3	36.3
本市以外の地域へ	63.7	63.7
本市内他市町村へ	13.3	13.3
道、他府縣へ	50.4	50.4
外地、外國へ	36.9	36.9

(四)移出人口の男女割合

移出人口總數中男二三八、〇〇二、女二〇四、五五七であつて男は女より三三、四四五多く女百に付男の割合は一六・三に該る。

之を轉住地別に見ると、本市内他區への移出にありては女百に付男の割合は一・二・四、本市以外の地域への移出にありては一・二〇・三であつて地域外への轉住者の男超過の割合は稍々大である。

而して後者の中本府内他市町村への移出にありては女百に付男の割合は一・八・三、道他府縣への移出にあり

ては一・九・三、外地外國への移出にありては一五六・三であつて外地外國への移出人口に於ける男超過の割合は著しく大である。

移出人口の男女割合

各區移出總數	男	女	女百に付男
本市内他區へ	2,001	2,001	100.0
本市以外の地域へ	2,356	1,016	23.3
本市内他市町村へ	6,642	5,642	84.9
道、他府縣へ	2,002	9,555	47.7
外地、外國へ	2,357	1,528	64.9

(六)區別移出人口

人口の移出状況を區別に見ると、最も多いのは中野の三〇、九四五であつて世田谷、荒川、目黒(各一九、〇〇〇以上)之に亞ぎ、之に反して最も少いのは麹町の四、八四五であつて向島、麻布(各六、〇〇〇以下)之に亞ぐ。之を區別人口に對比すると移出率(人口千に對する移出の割合)の最高は赤坂の二一・三・五三であつて中野、四谷、京橋(各一一〇・〇〇〇以上)之に亞ぎ、最低は向島の二七・三二であつて板橋、足立、遊谷(各四〇・〇〇

以下)順次相亞ぐ。

尙ほ中野、世田谷の二區が他區に比して著しく高位にあるのは無届退去者を一時に職權に依り抹消し寄留簿の整理をなしたる爲めであつて前年(中野一四、〇六七、世田谷一二、六五四)の約二倍の移出數を示してゐる。

區名	移出人口	本市内	本市以外	人口千に付移出
金市	15,842	3,633	12,209	3.6
麹町	8,842	3,000	5,842	3.0
神田	7,733	3,597	4,136	3.6
日本橋	7,737	3,597	4,140	3.6
京橋	16,433	7,200	9,233	7.2
芝	10,100	6,700	3,400	6.7
麻布	9,942	3,700	6,242	3.7
赤坂	11,842	4,100	7,742	4.1
四谷	11,000	6,600	4,400	6.6
牛込	10,800	5,700	5,100	5.7
小石川	13,100	7,300	5,800	7.3
本郷	8,300	3,100	5,200	3.1
下谷	15,842	8,100	7,742	8.1

區名	移出人口	男	女	女百に付男
淺草	15,970	9,690	6,280	153.7
本所	15,800	7,700	8,100	92.3
深川	11,000	6,900	4,100	163.4
新市部	11,200	7,300	3,900	187.2
品川	11,800	8,100	3,700	219.0
目黒	19,800	11,700	8,100	144.5
荏原	15,800	9,700	6,100	159.0
大森	11,800	7,000	4,800	145.8
蒲田	11,800	7,800	4,000	195.0
世田谷	12,900	7,800	5,100	152.9
澁谷	9,100	6,300	2,800	225.0
中野	14,900	6,100	8,800	68.9
杉並	16,400	9,700	6,700	143.4
豊島	13,900	7,700	6,200	122.6
荒川	16,400	10,700	5,700	187.7
板橋	18,300	11,300	7,000	161.4
足立	8,000	5,000	3,000	166.7
向島	5,900	3,500	2,400	145.8
葛飾	7,700	4,800	2,900	165.5



三、移入又は移出超過

(イ) 移入超過人口及其の前住地

昭和十五年中本市に於ける純移入人口の三四四、七〇二に較べて純移出人口は二二六、三三六であつて一一八、四六六の移入超過を示し人口千に對する移入超過率は一七・四七に該る。

これを原住地別に見ると道他府縣よりの移入超過が最も多く一一一、六二六を計へ、外地外國よりの移入超過(八、五六一)之に亞ぐ。尙本府内他市町村へは獨り移出超過(一、七二一)にして前者とその趣を異にしてゐる。

前住地別移入超過人口 (△印は移出超過)

前住地	純移入	純移出	移入超過
總計	三、五三三	三、二〇七	三二六
本府内他市町村	一〇、六〇〇	一三、三三三	△二、七三三
道他府縣	三三、三三三	三三、〇一三	三二〇
外地外國	二、三三三	一、八〇〇	五三三
人口千に付	三〇・八	二七・七	三・一

超過にして他の十九區は悉く移入超過を示すに至つた。

移入超過のありたる諸區の中其の數最も大なるは蒲田の一九、三一一であつて板橋、大森、豊島、江戸川(各一〇、〇〇〇以上)之に亞ぎ、之に反して最も少いのは神田の二二六であつて、牛込、麹町、本郷、本所、芝(各一、〇〇〇以下)順次相亞ぐ。

移出超過ありたる諸區の中其の數最も大なるは中野の九、七四九であつて赤坂、京橋、四谷、浅草(各一、六〇〇以上)之に亞ぎ、最も少いのは麻布の一九一であつて下谷、日本橋(各一、〇〇〇以下)相亞ぐ。

かくて舊市部に於ては一一、五九八の移出超過を示したるも新市部に於ては却つて一三一、〇六四の移入超過を見るに至つた。

各區に於ける移出入超過を人口に對比すると移入超過を見る諸區の中移入超過率(人口千に付)の最高は蒲田の七六・三九であつて板橋、江戸川、葛飾(各五〇・〇〇以上)之に亞ぎ、之に反して神田の〇・九八が最低であつて牛込、本所、麹町、本郷(各四・〇〇以下)相亞いで

(ロ) 移入超過人口の男女割合

移入超過人口中男六二、六四三、女五五、八二三であつて、六、八二〇の男超過を示し女百に付男の割合は一・二・二に該る。

更に之を地域的に見れば本府内他市町村は移出超過(女百に付男一三四・八)にして、道他府縣(一一一・一)と外地外國(一三三・一)とは何れも移入超過にして超過の割合は外地外國が二一・〇だけ高率である。

移入超過人口男女割合 (△印は移出超過)

前住地	男	女	女百に付男
總計	三、五三三	三、二〇七	一一一・一
本府内他市町村	△九、六〇〇	△一三、三三三	△七二・一
道他府縣	三三、三三三	三三、〇一三	一〇一・一
外地外國	二、三三三	一、八〇〇	一三三・一

(ハ) 區別移入又は移出超過人口

昭和十五年中本市各區に於ける人口の移出入超過の状況を見るに舊市部にありては麹町、神田、芝、牛込、小石川、本郷、本所、深川の八區を除く七區は何れも移出超過を示したるも、新市部にありては中野一區のみ移出

低率である。

移出超過を見たる諸區の中移出超過率(人口千に付)の最高は赤坂の一四〇・九六であつて中野、京橋、四谷(各三〇・〇〇以上)之に亞ぎ、最低は麻布の二・一四であつて下谷、浅草(各六・〇〇以下)の順である。

要之移出超過を見たる諸區は大部分舊市部に屬し、新市部の諸區は殆んど移入超過を示し舊市部全體としての移出超過率は五・六四、新市部全體としての移入超過率は二八・八四である。本市全體としては移入超過であつて一四・七八を示してゐる。

各區移入又は移出超過人口 (△印は移出超過)

區名	移入又は移出超過	本市内	本市以外	人口千に付
總計	三、五三三	三、二〇七	三二六	三二・六
本府内他市町村	△九、六〇〇	△一三、三三三	△二、七三三	△二七・一
道他府縣	三三、三三三	三三、〇一三	三二〇	三二・〇
外地外國	二、三三三	一、八〇〇	五三三	五・三
芝	△八一九	△二、三九九	△一、五〇〇	△一五・九
京橋	△六、一三三	△二、四六六	△三、六六六	△三六・七
日本橋	△九、五五五	△一、七七七	△七、七八八	△七八・九
神田	△二、三三三	△一、三三三	△一、〇〇〇	△一〇・〇
麹町	△一、六六六	△一、六六六	△〇	△〇・〇
本郷	△一、〇〇〇	△一、〇〇〇	△〇	△〇・〇
本所	△一、〇〇〇	△一、〇〇〇	△〇	△〇・〇
牛込	△一、〇〇〇	△一、〇〇〇	△〇	△〇・〇
中野	△九、七四九	△九、七四九	△〇	△九七・五
赤坂	△一四、〇九六	△一四、〇九六	△〇	△一四〇・九
四谷	△三〇、〇〇〇	△三〇、〇〇〇	△〇	△三〇〇・〇
浅草	△三〇、〇〇〇	△三〇、〇〇〇	△〇	△三〇〇・〇
板橋	△七六、三九九	△七六、三九九	△〇	△七六三・九
江戸川	△五〇、〇〇〇	△五〇、〇〇〇	△〇	△五〇〇・〇
葛飾	△五〇、〇〇〇	△五〇、〇〇〇	△〇	△五〇〇・〇



板橋	王子	荒川	豊島	杉並	中野	澁谷	世田谷	目黒	品川	新橋	本所	浅草	下谷	本郷	小石川	牛込
三三,二〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇

三三,二〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇
--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

西成	住吉	旭成	東成	東淀川	西淀川	南淀川	天王	大正	港正	西正	東正	北正	北花	北市	東市	江川	葛飾	城東	向島	足立	
三三,二〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇

三三,二〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇
--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

四三

板橋	王子	荒川	豊島	杉並	中野	澁谷	世田谷	目黒	品川	新橋	本所	浅草	下谷	本郷	小石川	牛込	四谷	赤坂	麻布
三三,二〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇

三三,二〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇
--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

西成	住吉	旭成	東成	東淀川	西淀川	南淀川	天王	大正	港正	西正	東正	北正	北花	北市	東市	江川	葛飾	城東	向島	足立
三三,二〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇

三三,二〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇
--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

四二

二、昭和十五年本邦六大都市國勢調査人口

(十月一日現在)

東京市	大阪市	神戶市	名古屋市	京都市	芝罘	青島	漢口
總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數
男	男	男	男	男	男	男	男
女	女	女	女	女	女	女	女



4 4  
1067

名古屋市	千種市	東海市	西宮市	中津市	中野市	昭和三十九年	熱田市	中川市	港南市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市
名古屋市	千種市	東海市	西宮市	中津市	中野市	昭和三十九年	熱田市	中川市	港南市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市
總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數
1,266,000	37,000	30,000	210,000	85,000	23,000	18,000	18,000	18,000	18,000	18,000	18,000	18,000	18,000	18,000	18,000
男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男
620,000	18,000	15,000	100,000	40,000	10,000	8,000	8,000	8,000	8,000	8,000	8,000	8,000	8,000	8,000	8,000
女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女
646,000	19,000	15,000	110,000	45,000	13,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000

名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市
名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市	名古屋市
總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數	總數
2,800,000	2,800,000	2,800,000	2,800,000	2,800,000	2,800,000	2,800,000	2,800,000	2,800,000	2,800,000	2,800,000	2,800,000	2,800,000	2,800,000	2,800,000	2,800,000
男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男
1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000
女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女
1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000	1,400,000

備考 本表の人口は昭和十六年四月十八日官報所載昭和十五年十月一日現在に於ける調査人口である。



